

▼：改頁 ☆：未翻訳

さてもその後、女行者松枝の竹世は能莫院らを討ち滅ぼして、彼の菅薦を故郷へ送り届け、遂に陸奥を過ぎり果て、北国に差し掛かり、越後の国の頸城郡、高田春日山の辺まで来にけり。この時は春も早如月の末なれども、越路の雪は未だ消えず、寒さ一入冴え返り、朔風(北風)肌へを冒すになん、竹世はこの日もあちこちの酒屋にて幾度となく酒を飲み、その日の申の頃おいに春日山の麓を過ぎるに、ここには飲み食いを旨とする良き酒店がありしかば、やがて内に進み入り、床机に尻をうち掛けつつ、「早く酒を飲ませよ」と再び三度呼び張りけり。

されば竹世は道すがら、世の人目を忍ばん為に旅虚無僧の扮装して、面を天蓋にて隠せしかば、行く手行く手の城下は更なり、あがた田舎の果てまでも、竹世の姿画を巷に掲げて詮索嚴重なりけれども見咎める者は無かりけり。これはさて置き、酒屋の主人は今竹世が酒を出せと急がし呼び張る声を聞くに、姿は男めきたれども声はまさしく女なり。さればとて世の中に女の修行者が無きにあらねば深くもこれを怪しまず、忙わしく出迎えて、

「聖、酒を召されるか。酒は手造りの中汲み※なり。肴は全て売り尽くして、鮭の魚の酢ばやり☆と青菜のひたし物のみなり。それを参らせ候わんか」と問えば竹世は頷いて、

「我は魚類を欲すれども、売り尽くしたなら詮術無し。早く酒を温めて、もて来よかし」と急がすにぞ、主人はやがてその肴と酒一銚子をもて来つつ、「いざ」とて竹世の辺に置くを忙わしく引き付けて、独酌にて飲む程に幾度となく銚子を替えて、早一二升の酒を飲みたり。しかれども肴無ければ、なお物足らぬ心地して、再び主人を呼び近づけ、

「実に魚を売り尽くせしか。和主たちの食料の煮魚なりとも持て来て食わせよ。我が良き値に買わんず」と云うを主人は聞きながら、

「そは宣わする事ながら、我々の食料は麦飯、干し菜の類のみ。煮魚などは候わず」と云うに竹世はくどくど呟きながら、塩鮭とひたし物をうち食って、しきりに酒を飲みにけり。かかる所に十八九才の大女で派手にいかめしき出で立ちしたるが一人の下部と一人の下女を従えて、この酒屋に来にければ、主人は忙わしく立ち出て、竹世が尻を掛けたる床机の向かいの小座敷に迎え入れ、数多の酒肴を持って出て、この主従にすすめけり。

※中汲み：上澄みと底のよどみの中間を汲みとった酒。

その時竹世は襟を伸ばして、彼女らが飲み食いする酒肴を見るに、酒は澄み酒の良き物とおぼしく、肴は焼き鳥と煮魚なり。竹世はこれを見てしより、たちまちひどく怒って声を振り立て、主人を呼び付け、

「汝は先に煮魚は皆売り尽くして無しと云いしが、後より来るあの人々には酒も澄みたるをうち飲ませ。肴も数多置き並べ、あくまでにすすめるはそもそもいかなる仕方ぞや。人の銭も我が銭も値に変わる事はあらじを客選みをして物を売る、真に烏澁※の者かな」と息巻き責め罵るを主人は急に押しなだめ、

「聖、悪しくな思いたまいそ。あの女中主従は今朝より梅見にいでたまいしが、酒肴を我が店へ預け置きたまいしなり。かかれば座敷を貸したるのみ。酒肴を売りとるならぬに思い違えて罵り

たまうは尼御前に似氣無き事にこそ」と詛云い説くを耳にもかけぬ竹世は今日幾所にてか酒の上に
▼酒を過ぎして、ひどく酔いたる癖なれば、しきりに苛立ち罵って、言葉戦い果てしなく、怒りに
任せて主人の頭をしたたか打ちしかば、後ろ様に逃げるとて後辺にいたる供の下女に倒れかかっ
たうと伏す、此の体たらくに彼の大女は耐えずやありけん。身を起こし来て、竹世をひどく罵るに
ぞ、竹世はいよいよ怒り狂って、

「私が主人をうち倒せしとて、和女郎に預かる事やはある。云い分あれば表へいでよ。今更相手
は選ばぬぞ」と云うにこらえぬその女も諸共に走り出て、既に竹世を打たんとて拳を上げて走りか
かるを竹世は早く引き外し、彼の大女の肩先を砕けるばかりにはたと打てば、ひるむを得たりと引
き寄せて、又、続け様に打ちしかば、死せるが如くに弱りたり。されば大女の供人らは恐れて何処へ
か逃げ失せけん。主人も奥へ走り隠れて、支える者は無かりけり。

かくて竹世は彼の大女を此の酒店の向かいの溝堀に投げ飛ばし、からからと笑いつつ、再び内に
走り入り、彼の酒肴を欲しいままに飲み食い尽くして、身を起こし旅包みを背に負って、足に任
せて走りいでしが、酒の酔いひどく昇って一步は高く一步は低く、只ひよろひよるとよろめきなが
ら五七町走る程に、しかるべき人の宿所とおぼしき冠木門の辺より一つの赤犬が走り出て、しき
りに竹世を吠えしかば、竹世はひどく腹立てて、「此の畜生め」と罵りながら、腰に帯たる戒刀を
きらりと抜いて斬らんとするに、犬はなお吠えながら逃げてこの屋敷に程近き山川の辺に留まり、
尚もひたすら吠えけるを竹世はすかさず追っかけて再び丁と斬りつけるに、犬もまた眼早く、その
ままひらりと避けしかば、竹世は思わず空を斬りたる力余ってつまずきけん。身を躍らしてその川
へたちまちざんぶと落ち入りけり。しかれども幸いにこの川の瀬は浅くして三里※を浸すばかりなり
ければ這い上らんともがくものから、一つにはひどく酔い進退も自由ならず、又、一つには身の内
全て水に濡れて、寒さ耐え難く手足がまじり詮術無し。

※鳥澁(おこ):ばかっていること。愚かなさま。 ※三里(さんり):鍼灸医学のつぼの一。膝頭の下三寸、外側の少しくぼんだ所。

されどもようやく身を起こし、落とした戒刀と風呂敷包みを拾い取り、岸に生たる柳の枝にすが
って登らんとしてけるに、柳の糸がふっと切れ、再びどうと落ちる時、天蓋の紐さえ切れて、大わ
らわにぞなりにける。かかる所に年廿一二なる大女が下部三四人を従えて、此の所へ走り来つ。

▼先に竹世に打たれたる女の供人もこの内にあり、既に竹世が水中に落ち入りたるを見出して、
「あれこそ先に夕映様を溝堀へうち倒せし女虚無僧に候」と云うにその大女も立ち止まり見て、
大きに喜び、

「しからは皆々下りたちて、手取りにせよ」と下知すれば、「承りぬ」と答えも果てず、皆水中に飛
び入って、竹世の手を取り足を取り、縦に引き横に引きずり、早川端に押し上し、いと太やかなる
麻縄でくびれるまでに縛めけり。

かかりし程に先に竹世に打たれたる大女も彼の溝堀より這い出て、両三人の下部をかり催し、手
に手に六尺棒を引き下げて、竹世の行方を尋ねつつ、囚らずここに落ち合せて、此の体たらくを見
て大きに喜びうち連れだちて、生け捕りたる竹世を冠木門の内へ引き入れさせ、そのまま座敷の縁側
の柱へ厳しく繋がせて、「其奴を打て」と下知すれば、はやりを☆の下部一両人が手頃な棒を携えて
竹世をしたたか打ちにけり。此の時竹世はようやくに酒の酔いも半ば醒め、生け捕られしを知ると
云えども、今言葉をもて縛めを逃るべきにあらざれば、一言半句も争わず眼を閉じて到りける。

さても此の二人の大女は姉妹にて姉の名を黄昏、妹を夕映と云いけり。又、此の所は春日山の麓にて、^{りょうめい} 天明と云う一村なり。この姉妹の親は代々この所の郷士にて、先祖相伝の田畑数多あれども家を継ぐべき男子無し。しかるに黄昏、夕映は女に似気無く武芸を好んで、心様が猛かりしかば、婿取りせられん事を嫌って、萬に我がままに振る舞いければ、里人らはその猛きに恐れて仲立ちする者無かりけり。なかんずく夕映はその性気早き女にて、何事にまれ人に先だち走りいでざる事の無ければ、世の人彼女をあだ名して一つ星の夕映と呼びなし、姉を夕涼みの黄昏とあだ名してけり。

父は先に世を去って母親のみが家にあり。近き頃に剃髪して法名を妙孔と云いけり。あだし事はさて置きつ(閑話休題)、この日姉の黄昏は妹夕映が供にたちたる下女、下部が慌ただしく走り帰って、夕映が女虚無僧に打たれたる事の由をしかじかと告げにければ、黄昏は驚きかつ怒り、俄かに両三人の下部らを従え、をさをさ竹世を尋ねる程に、宿所に近き山川に竹世が落ちたるを見出して、矢庭に絡め捕らせし折、夕映もまた打たれたる痛みを忍んで、下部どもをかり催し、竹世の行方を尋ねつつ、姉妹そこに落ち合って、竹世を宿所に引きずり帰って、かたの如くに打たせしなり。

その時夕映は齒を食いしばり、下部らを▼叱り退け、
「汝らの打ち様はいと手温くて見るに耐えず。此奴を領主へ聞こえ上げ、人の手をもて恨みを返すはこの憤りを晴らすに足らず。我が手づから思いのままに打ちさいなんで腹を醫ん。これ見よかし」と息巻きながら檜の木の手振りひらめかし、既に打たんとする折から、奥の方より一人の女が忙わしく立ち出て、「人々、何故息巻きたまう」と問えば、黄昏、夕映は竹世を絡め捕りたる事の趣を初めより終わりまで、事しかじかと告げにけり。この時夕暮れなりければ、奥よりいでたるその女は竹世をつくづくと透かし見て、

「彼女は女でありながら、髪を挟み姿をやつすは浮世を忍ぶ者なるべし。私まずよく彼女を見んに、さあ灯し火を持ちねかし」と云うに下部どもは心を得て、燭台を二つ三つ持て来つつ、あちこちに火を灯せしかば、真昼の如く明かりけり。その時にその女は竹世の辺に立ち寄って、と見かう見つつ驚いて、

「そなたは私と義を結びたる竹世にはあらずや」と問うに竹世は眼を開いて、彼女の女をきっと見て、或るいは喜び或るいはいぶかり、

「姉人、願うは私を早く救いたまえ」と叫びけり。竹世が姉と呼ぶ者はこれすなわち別人ならず、彼の春雨の大箱なり。

その時大箱は黄昏姉妹を見返って、

「この女虚無僧は予て御身達に物語りせし、彼の碓氷峠にて荒れたる虎を拳にて、うち殺したる竹世なり。ちとの恨みがありとて、私にめでて許したまえ」と云うに黄昏、夕映は驚く事大方ならず、姉妹等しく竹世の繩を手早く解いて、上座の大箱の方辺に押し上して、うやうやしく額を突き、

「我々、眼ありながら、さる勇婦人なるを知らず、ひどく無礼をしはべりぬ。許したまえ」と詫びにけり。竹世はこの時、酒の酔いが既に全く醒めしかば、忙わしくへり下り、礼を返さんとしてけるを黄昏、夕映は押し止め、

「刀自は身の内に痛みもあらんをいかでか慇懃なる業をしたまうべき。只ゆるやかに座したまえ」と云うに竹世は喜んで、知らぬ事とて酔いに任して、夕映をうち倒せし過ちを詫びにけり。かかりし程に、黄昏らの母妙孔は予て世の風聞に伝え聞いたる竹世が娘共と和睦して、交わりを結びし由

を聞きつつ深く喜んで、奥より出て対面し、酒食しゅしょくを設けてもてなしけり。

されば竹世は大箱らに我が身の上の始め終わり、姉の仇あだを討ちし事、この故ゆえに出羽でわの国の牡鹿嶋おじかじまへ流されし事、又、青芝そんじろう、損次郎らと義を結びし事、紫苑しおんの為ももんじんのぶすまに毛門神野けもんじんを打ち倒せし事、▼又、横島照行よこしまてるつら、和久系わくいとらに謀られて無実の罪に陥りしかば、止む事おちいを得ず身を逃れ、照行のが、和久系てるつららを討ち果たして恨みを返し、更あおしに青芝そんじろう、損次郎らの助けを得て、旅虚無僧たびこむそうに身をやつし、河内かわちの国の金剛山こんごうざんの花殻はなからの妙達みょうたつ、青嵐あおあらしの青柳あおやぎらと一つにならんとて彼の地かに赴く事の由を告げ知らせ、又、悪僧能莫院あくそうのうまくいんを殺害し、囚すがこもらず菅薦おもむきを救いたる事の趣おもむきも物語れば、人皆膝ひざが進むを覚えず、ひたすら誉めて止まざりけり。竹世は重ねて大箱にうち向かい、

「御身おんみは又、何ゆえらの故おりのたきがりに佐渡さつの折瀧許おりたきに居たまわで、ここどうりゅうに逗留とじしたまうやらん」と問えば大箱は「然ればとよ、私わらわはそなたおりのたきに別れし後とじも、折瀧おりたきの刀自とじのもとに在る事、半年余りになりしかば、親の事が心もとなく、妹園喜代そのきよを故郷へ帰して、彼の地かの様子を問わせしに、公おおやけの御沙汰ごさたは朱良井あからい、稲妻いなづまがこしらえて、私わらわを詮索せんさくの事も緩みぬ。母がひどく苦勞したまうに十里なりとも此方へ近き里へ移り住みたまえ、ついで越後かすがやまの春日山たすがれの黄昏ゆうばえ、夕映ゆいの姉妹いぢめんはいと遠き親類なるが、もとより一面の契ちぎりあり。私わらわの上を伝え聞き、此方へ来よと文をもて、しばしば宋公明村そうこうめいむらへ云いおこせしとて、妹園喜代そのきよが消息しょうそくして遙々はるばる佐渡へ告げれば、親の心を休めん為ふしに節柴殿ふしに別れを告げて、去年こぞの冬よりここへ来つ。夕映ゆうばえ、一つ星なぎなたの姉妹くさりがまに薙刀なぎなた、鎖鎌くさりがまの手を教え、しばらく月日を送りにき。しかるに越中はやつきの国の早月がしらはなまどに女武者ゆうふ頭うぶ花わらわ的うとと云う勇婦あり。これも私わらわと此の年頃まじ疎からず交わって、又、一面の親しみあり。これにより故郷の宋公明村そうこうめいむらへ幾度となく文にて私の安否を問わせ、今はこの地にある由そのきよを園喜代はるばるより聞いたりとて、此の春ひきやくここへも飛脚まねをもて招かれる事しきりなり。この故ゆえに遠からず越中はやつきに行かまく欲す。そなたも私わらわと諸共かに彼の地かに行かば良き連れあらん」と云うを竹世は聞きながら、

「そは幸いではべれども、私わらわは数多あまたの人を害して、身を逃れたる罪も重かり。さるを御身おんみを巻き添いせば、後悔するとも及ぶべからず。且つ、私わらわは青芝あおし夫婦かねと予て約束せし由あり。青芝あおしらも遠からず、河内へ行かんと云われたり。かかればまず此の度は金剛山こんごうざんへ赴おもむいて、妙達みょうたつ、青柳あおやぎを頼むべし」と云うに大箱は強しいてすすめず、竹世をしばらくここに留めて、六七日へを経にければ、大箱たそがれは黄昏たそがれ親子姉妹に別れを告げて、越中はやつき早月はやつきの里を指し、発ちいでんとしてければ、竹世もまた道までとて諸共はつそくに発足す。されば黄昏ゆうばえ、夕映ゆうばえは別れを惜しみ酒宴さけうちを設けて、大箱たそがれには金二十両はなむけとして、竹世には十両を贈り、彼の戒刀かいとうと旅包てんがいみ、天蓋てんがいを返しけり。かくて大箱と竹世は春日山の宿かすがやまを発ちいで、各々おのおのの志す方へ赴おもむく程に、行く手ふたすじに二筋おいはけみちの追分道あり。ここに至って大箱は事しかじかと人に問うに、その人教えて、

「都の方おもむへ赴おもむかんとならば、左の道を行きたまえ。又、当国どうごくの早月はやつきへ赴おもむかんとならば右の道を行きたまえ」と懇ろに教えけり。かくて大箱は竹世と共にその辺ほとりの酒屋ほりに立ち寄り、しばし別れの酒酌さけみ交わし、竹世の酒あやまの過いさちあるを諫め諭し、遂に酒屋を立ちいでれば、竹世はいとど名残なごりを惜しみ、▼且つその諫いさめに感服して、やがて右左へ別れけり。竹世の事、此の下いさにしばらく物語り無し。

かくて大箱はこれより一人旅となって、しきりに道を急ぐ程に、越中はやつきの国の早月はやつきの里に程遠からぬほとけ仏たけが岳ふもとの麓よ路よを過ぎるとて、思わずも掛けたる繩なに左右の足を絡まれて、たちまちはたと倒れ

しかば、枯れ尾花の辺よりいと凄まじき大男が両三人走り出て、大箱をひどく縛め、仕合せ良しとさざめいて峠の方へ引き行きけり。

○ここに又、越中の国の新川郡の仏が岳に三人の勇婦あり。第一の山主を珠簾燕と云えり。その次を瀬那遣の腐鶏と呼びなしたり。又その次の山主は顔色ことに白かりければ、艶素顔雌雉とぞ呼びなしたる。その中に燕と雌雉は先に鎌倉の將軍頼朝公の時、謀反の聞こえあつて討ち滅ばされたる城の太郎資茂の子孫なり。彼女らは逆臣の余類なりとて娶る者も無かりしに、その性をささ武芸を好んで、心様あくまで猛きさる勇婦どもなりければ、いつしか会稽(復讐)※の義兵を起し、先亡の恨みを清めんとて、男女の味方を招き集め、仏が岳に砦を構えて四五百人の雑兵あり。又、腐鶏は近頃滅び失せたる比企の判官能員の残党の娘なり。これも劣らぬ勇婦にて、北国に落ち下り、ある日仏が岳の麓を過ぎるとて燕と刃を合わせしに、互いに勝ち負け無かりしかば、燕はその武勇を誉めて志を告げ知らせ、すなわち彼女を砦に留めて、第二の山主にした。しかるに燕は近頃新身の良き刀を得たり。これにより男女を選ばず、百人の軀を試して、軍神の血祭りに供えんと云う念願を發起せしかば、手下の雑兵らを麓路へ遣わして、日毎に道連れ無き旅人を絡め捕らせ、その刀を試し見て、かつ軍神を奉らんとて、その用意をしたりける。かかりし程に雑兵らはこの日の夕暮れに繩の罾にて大箱を掛け倒し、矢庭にひどく縛めて、やがて砦へ引き持て来るに、夜は早明け方近ければ、明けるを待って、しかじかと燕に告げしかば、燕は喜んで、今日は事の手始めなれば腐鶏、雌雉も出席したまえて、その山主らを馬見場へ招き集え、予て築かせ置きたる土俵の中央へ大箱を押し据えさせて、燕はその刀を携えつつ、早その所へ立ちいづれば、腐鶏、雌雉は床机に尻を掛けて、これを見る。

※会稽(かいけい): 復讐。しかえし。

又、雑兵らは或るいは水を汲み入れたる手桶を用意し、或るいは銅の盆を捧げ持ち、大箱の血潮を受け入れ、軍神の犠牲にすべき用意をぞしたりける。その事の体たらくは既にかくの如くなれば、大箱は今更に悲しみ告げて命を乞うとも許さるべくもあらざれば、只眼を閉じ口をつぐんで、ここに死を待つのみなりしが、思いかねてや空うち仰ぎ、▼

「いかなれば、我大箱はかくまで運命拙きや。犯せる咎は逃れても、遂に逃れぬ一期の災い。かくなる由を故郷の親に告げる由無し。弥陀仏、弥陀仏」と念じたる末期の一句に燕は既に斬らんと立ち寄りしが、たちまちに聞き咎め、

「やや汝は何とか云いし。今大箱と云いけるは元よりその身の名にあらずや。汝は何処の大箱なるぞ」と問うを大箱見返って、

「こと新しく問いでうかな。今更誰に包むべき、私は津の国の宋公明村の者にして、領主の女右筆たりし春雨の大箱なり」と名乗るを聞いて燕は驚き慌てて、刀をもて大箱が縛めの繩を斬り捨て、手を携え上座に押し上し、

「私は眼が明らかならねば、さる女君子と知らずして、害せんとせし愚かさよ。許させたまえ」とうち詫びて腐鶏、雌雉を方辺に招き、

「此の刀自は予ねてより御身たちと噂をしたる彼の春雨の大箱殿なり。とく見参に入りたまえ」と云うに驚く腐鶏、雌雉。兩人等しく額突いて、

「春雨の刀自は古も類稀なる賢女にて、人を救うに財を惜しまず、広く愛して仁義ありと、世の風聞に伝え聞き、いと慕わしく思いしに、囚らず見参に入りし事、大方ならぬ幸なり。さるを只世の常の旅人なりと思ひなして、脅かし奉りし罪を許させたまえかし」と言葉等しくうち詫びて、各々その姓名を告げ知らせ、この砦に立て籠もりし志を説き示し、やがて書院へ伴いつつ、酒宴を設けて大箱をいと懇ろにもてなしけり。

傾城水滸伝 第七編ノ二 曲亭馬琴著 歌川国安画

かくて大箱は三人の勇婦らの浅からぬもてなしに、しばし忘れし身の内、事の始め故郷に在りし時に止む事を得ず、彼の義太吉を害したりける事の趣、その折に朱良井、稲妻の情けによって捕らわれを幸く逃れて、佐渡、越後に憂き世（浮世）を忍びし事の元末、又、早月なる花的の招きによって彼の里へ赴かんと欲する事、或いは竹世の武勇の事、又、夜叉天王小蝶らが三世姫を守りかすづいて賤の砦に籠もりたる体たらくを説き示し、

「願わくば各々方も三世姫に従ひ奉り、志を遂げたまえ。さる時、名も正しく真の義兵と云われんのみ。得たる刀を試すとて、恨み無き人を殺せば神も仏も見放して、悪報その身に迫るべし。世に無益の殺生は思い留まりたまえかし」と道理せめて諫めれば、燕、腐鶏、雌雉らは且つ感じ且つ恥て、身の過ちをぞ詫びにける。

かくてその次の日に大箱は三人の勇婦に喜びを述べ、別れを告げて立ち去らんとしたりしを燕らは固く留めて、日毎に酒宴を設けつつ、又、大箱をもてなしければ、大箱は心ならずも、此の砦に逗留して五六日を過ぎしけり。

しかるにある日、遠見の雑兵が走り来て、

「只今、艶やかなる少年が供人七人ばかりを従えて、その身は乗り物に乗りたるが麓を過ぎり候」と告げるを聞いて腐鶏は

「そは我が好む獲物なり。手取りにせん」と云いもあえず、忙わしく立ち上がるを大箱、燕が押し止めて、

「そは又、無益の殺生なり。思い捨てたまえかし」と兩人等しく諫めるを耳にもかけぬ腐鶏は早外の方へ走り出て、馬にひらりとうち乗りつつ、雑兵数多従えて、麓を指してぞ馳せたりける。

○さる程に腐鶏は彼の供人らを討ち散らし、駕籠の内の美少年と駕籠かき二人を生け捕って、仕合わせ良しと三座めかし（騒いで）※て、やがて砦へ帰りけり。しかれども時移るまで、腐鶏は▼客座敷へ訪れもせざりしを燕は心にいぶかって、雑兵を呼び由を問えばその者答えて、

「瀬那遣様は生け捕りたまひし美少年をそのまま部屋へ引き入れて、うち戯れていたまうなり」と云うに燕は苦笑いして、

「又、腐鶏の持病起こりぬ。いと苦々しき事にこそ」と云うに大箱も微笑んで、

「瀬那遣殿は賢しげなるも、色好み癖があるにやあらん。さらば彼処へ赴いて、諫めてその少年を放ちやるべうもや」と云うに燕も雌雉も「しかるべし」と答えつつ、三人等しく腐鶏の部屋に

至りて様子を見るに、腐鶏は彼の少年を引き捕らえ、かき口説き、更に余念も無かりしに、今大箱
ら三人の来るに驚き、且つ、恥て早く少年を放ちけり。その時大箱は腐鶏にうち向かい、
「瀬那遣の刀自、いとはばかりのある事なれども、大事を思い立ちながら色を好むは似気無き業な
り。真に千慮の一失※ならん」と云いつつ少年を見返って、
「そもそも和主は何処の人ぞ」と問えば少年は頭をもたげて、
「それがし事は当国の新川の郡司の小姓にて、望月桂之介と呼ばれる者なり。請い願わくば、山主様
よろしく取り持ち計らって、放ち帰させたまえかし」と云うに大箱頷いて、
「否、私は此の砦の山主にはあらず。他所より来る旅人なるが、ゆくり無く(不意に)※留められて、
しばし逗留したるのみ。只今和殿の名乗るを聞くに、新川の郡司に仕われる小姓にてありけるよな。
和殿の主の花的殿とは私は浅からぬ交わりあり。此の度俄かに思い起こして、彼処へ赴く者なり
かし」と云うを桂之介は聞きながら、
「否、それがしが仕える主は花的殿では候わず。今新川郡には男女二人の郡司あり。東の郡司は女
武者頭の花的殿なり。又、西の郡司は黒部の次官篤政主なり。それがしが仕えるは黒部殿にて候」
と云うを大箱は聞きながら心の内に思う様、
「……此の桂之介とやらんは花的の家の子(家臣)ならずとも、その相役の小姓ならん。我が
今ここで救わずば、後に花的に会わん時、云い説くに言葉無かるべし。諫めて放ち帰させん」と思
案をしつつ形を改め、腐鶏にうち向かい、言葉を尽くして諫めるに、腐鶏は答えず、事果つべうも
あらざるを燕は既に早大箱の心を察して腐鶏の答えを待たず、雑兵らに云い付けて、生け捕た
りける駕籠かきらの縛めの縄を解き許させ、元の如くに桂之介を乗り物にうち乗せて麓の方まで
雑兵に送れとて遣わしけり。

※千慮の一失(せんりょのいっしつ)賢者でも、時には間違ってしまうものだ。

その時桂之介は大箱と燕を数度伏し拝み、
「二柱の山主君、此の再生の大恩を何時の程にか忘るべき。いと有り難き情けにこそ」と云うを大
箱押し止めて、
「否、先にも云いつる如く、私はここの山主に非ず。通りがかりの旅人なれども、和殿の主君と同
役の花的の刀自に縁あれば、いささか言葉を添えたるのみ。さあさあ出て行きたまえ」と云い諭し
てぞ見送りける。されば又、腐鶏は手折りの花と思いたる美少年を大箱と燕の計らいで、そのま
ま放ちやりたるをいと口惜しく思えども、ひとえに仁義を旨とする大箱にたしなめられて遮り留
める事も得ならず、只憤り▼胸に充ち、黙然として居たりけり。

※三座めく(さんざめく):大勢でにぎやかに騒ぐ。 ※ゆくりなく:思いがけず。不意に。

○さる程に望月桂之介の供人らは先に腐鶏の一軍の大勢に追い散らされて、逃げて黒部川の宿所へ
立ち帰り、主なりける黒部の次官篤政に仏が岳の山立(山賊)らに桂之介と駕籠かきの兩人を生け
捕られたる事の趣を斯様斯様と告げにければ、篤政これを聞きも終らず、眼を怒らし声を振り立
て、
「汝らは何の為に桂之介の供に立ちたる。高が知れたる山賊らに我が年頃寵愛する少年を奪い取

られて言い訳が立つべきや。再び彼処に走り行き、桂之介を取り返せ。なおざりにして虚しく帰らば、一人も許さず頭を刎ん。さあ行かずや」と息巻きたる主の怒りに若党、下部は重ねて云わん由も無く、困じ果て(困り果て)※つつ出て行く程に、篤政は又、屈強の組子二三十人に事しかじかと説き示し、汝らも桂之介の供人らを相助けて賊の砦を打ち破り、我が寵愛を取り返し、速やかに帰るべし」といと厳かに下知しけり。かくてその供人らは組子どもと諸共に元の麓まで赴く程に、桂之介は乗り物にうち乗って、彼の二人の駕籠かきらにかかしつつ、此方を指して来にければ、皆々いぶかり且つ喜んで、事の由を尋ねるに、桂之介は微笑んで、

「我らは賊に虜にせられて、山の砦へ引かれしかども、三寸不爛(口達者/中国語)の舌をもて、彼女らに説いてたしなめれば、彼女らは恥ておめおめと只今放ち帰せしなり」と云うに皆々言葉ひとしく、

「しかりとも。御主君へは我々の働きにて取り返せしと申したまえ。さなくては我々は重き咎めを被るべし。この意を頼み奉る」と云うに桂之介は頷いて、

「そこの意味は心得たり。我れ宜しく申さん」とて皆諸共に立ち帰りつつ、桂之介は奥に至って主の黒部に告げる様、

「それがし今日、御菩提所へ御代参の道にして私が岳の女謀反人らに生け捕られ候しが、それがしちっとも騒がずして、我は新川の郡領の黒部篤政主の小姓なり。汝ら速やかに送り帰すさば、我が主君が大軍をもて砦を打ち破りたまうなるべし。その折後悔すべからずと言葉鋭く脅しにければ、威勢にや恐れけん、謀反人らは一議に及ばず、それがしを乗り物にうち乗せて此方の駕籠かきにかかせつつ、大勢麓まで送る折から、それがしの供人が数多の組子諸共に迎いの為に来にければ、山立ち(山賊)らはこれを見て、恐れて近づく者も無く、それがしをうち捨てて逃げて砦へ帰りたり」とまこと真しやかに告げるに、篤政は聞きつつ喜んで、

「汝の才覚、さもあるべし。賢くも計りしよな」とひたすら誉めて、桂之介の供人と組子らにも引き出物をぞ取らせける。

※困じ果てる(こうじはてる): 困り果てる。どうしたらよいのか処置・判断に苦しむ。

○そもそも越中の国の新川郡に入江川あり。その川上を黒部川ととなえ、又、川下を早月川と▼呼びなしたり。早月或るいは早日とも云えり。この所に当時二人の郡領あり。富山の城主の手について、此の一郡を支配しけり。されば黒部の郡領はその次官篤政なり。この人ちとの学問あれども武芸に疎く勇力無し。その心邪にて人の才を嫉む事多かり。しかのみならず男色を好み、望月桂之介と呼びなしたる歳十六ばかりの小姓を寵愛して、二なき者ぞと思ひける。又、早月の郡領を早月郡領友綱と云いけり。この人は源三位頼政の嫡子伊豆守仲綱の妾腹の末の子なりき。仲綱が宇治にて討ち死にの頃、その母にかき抱かれ、縁について越中の早月の里の人となりしより、鎌倉の將軍頼朝卿の時、この地の郡司になされけり。されば友綱は父祖の家業を受け継いで、弓射る事の妙手なりしが不幸にして男子無く、花的と名付けたる娘を只一人を持てり。さばれ花的是女に似気無く、その性武芸を好みしかば、父は喜んで教えるに年々に上達して、なかんづく弓射る技は曾祖頼政にも劣らざる技量あるにより、世の人彼女をあだ名して女弓取の花的と呼びなしたり。父母はうち続いて去ぬる年に世を去りしかど、花的の武芸は京、鎌倉まで隠れ無ければ、やがて女武者頭にせられて父の職を継ぎしより、黒部の次官と諸共に新川郡の支配たり。

○これはさて置き、さてその後、春雨の大箱は燕らに押し止められて、仏が岳の砦にある事、七日ばかりに及びしかば、幾度となく別れを告げて、花的許へ行かんと云うに燕、腐鶏、雌雉らも、又、今更に留めかねて、次の日別れの酒宴を催し、すなわち事の餞として金五十両を贈りけり。されども大箱はこれを取らずに押し返しつつ呑みしを燕らは様々に言葉を尽くしてすすめしかば、止む事を得ず是を受けて、その日仏が岳を下り、花的の宿所へ赴き、かくと訪い※する程に、花的は喜び出迎えて、客座敷にて酒宴を設け、大方ならずもてなしけり。

されば花的は先に公役により難波へ赴きし時、大箱と面を合わせしより、互いに捨て難き思いあり。これにより大箱がゆくりなく（不意に）人を害して身を逃れたる由を伝え聞いて驚き憂い、我が宿所に匿わんとて、しばしば宋公明村へ飛脚を遣わし、大箱の妹園喜代にその真心を告げしかば、大箱も彼女の志に愛でて、此の度この地に来たるなり。かくて大箱はその身の災難、斯様斯様と花的に告げ知らせ、又、去ぬる日の夕暮れにしかじかの事あって仏が岳の砦へ捕らわれ、命も既に危うかりしに、又、しかじかの事により、返って燕ら三人の勇婦に尊敬せられ、止む事を得ず彼の砦に五六日逗留して在りし程に、当郡黒部殿の小姓と聞こえし、望月桂之介と云う少年を救ったり。その故は斯様斯様と事つまびらかに告げしかば、花的は聞いて眉をひそめ、

「その桂之介と云う者は有る事無い事を皆主に告げて、民を虐げ人を損なう寧悪※の曲者なり。彼が図らずも仏が岳の勇婦らに捕らえられしはこの一部の幸いならんに、刀自はかくとも知りたまわねば、彼を救いたまいし事、今更後悔限りなし。又、彼の黒部▼篤政は学問を鼻にかけ、人の能を嫉む小人なり。よしや御身が桂之介を救いたまいし事の由を私が彼の人に告げるとも、真とは思ふべからず。由無き業をしたまいけるよ」と云うを大箱押し止めて、

「さな宣いそ。ことわざにも、花に百日紅あれども人に千日の好意無し※。例え黒部はねちけたりとも、彼の人は文官にて御身は婦人の事なれば、萬の事に押し下り、美しく交わりたまうが、その身の為ではべるべし」と云うに花的は感服して、「真にさなり」と答えけり。

※訪い（おとない）：①音の立つこと。②気配。③訪問。④評判 ※佞悪（ねいあく）：心のねじけていること。

※花無百日紅 人無千日好：中国のことわざ。人生よい時は続かないという意味。

とかくする程に、春も早弥生の初めになりけり。北国の習いにて二月は雪がまだ消えねば、村々の稲荷祭りを三月の初午にする所あり。されば黒部と早月の二里の鎮守は稲荷にて、新川稲荷ととなえたり。此の春の初午祭りも例年の如く、黒部、早月、浦山の里人らが家々毎に様々の灯籠を掲げて、▼踊り舞う事あり。大箱はこれらの由を伝え聞き、「いざ、行って見ん」と云う。

さばれ花的は

「役義ある身のかかる折に、私にはいで難し。下部を具して行きたまえ」とて、供二人をかし付けて、案内せよとて遣わしけり。この日は宵宮なりければ大箱はあちこちの灯籠を見歩くに、いと大きな屋敷の物見の窓の辺に一組の踊り屋台を建てて、鐘太鼓にて囃しつつ、花笠を頂いて様々の面をかけた者がいと面白げに踊るあり。大箱は是を見んとて、急いでそこへ立ち寄りけるに、人数多立ち集いて定かには見難かりしを供の下部が先に進んで諸人をかき分けつつ、大箱を前に立たして思いのままに見せけるに、大箱は田舎びたる踊りの手振りに耐えずやありけん、思わず高く笑いけり。しかるにこの所は黒部篤政の屋敷にて、その物見の窓の内に篤政は桂之介を従えて、踊り

を見て在りしかば、桂之介は^{かつらのすけ}大箱が今笑う声を遙かにこれを見出して、
「あれはまさしく去ぬる日に、それがしを生け捕った^{ほとけ たけ さんしゅ}仏が岳の山主なり」と主の^{あつまさ}篤政に囁きければ、
^{あつまさ}篤政は驚き、且つ喜んで、俄かに^{にわ くみこ}組子ら呼び集め、「その^{ぞくふ}賊婦を生け捕れ」と^{たんべいきゅう げち}短兵急に下知しけり。
大箱はかくとも知らず、既に踊りも果てしかば^{しゆくしよ}宿所の方へ五六町、立ち帰らんとする程に、追っ
かけ来る^{くろべ くみこ}黒部の組子らがひしひしと取り巻いて、有無を云わせず大箱に^{や えなわ}八重縄掛けて厳しく^{いまし}縛め、
おっ立ておっ立て引き持て帰って、かくと^{ちゅうしん}注進したりける。

その時^{くろべあつまさ}黒部篤政は端近く立ち出て、^{えんがわ ほどり}縁側の^{しゆくしよ}辺に引き据えたる大箱をきと^{にら}睨まえて、
「^{なんじ}汝は女の方際にて^{ほとけ たけ}仏が岳へ閉じ籠もり、^{きもふと むほん}肝太くも謀反を起こせし^{かしら}山賊の頭でありながら、我が
^{ほどり}屋敷の^{はいかい}辺近く徘徊せしは^{てん あみ}天の網、今は^{のが}逃れぬ所なり。富山の城へ^{つか}遣わして、かたの如くに行わん。
^{かくご}覚悟をせよ」と^{ののし}罵ったり。その時大箱は^{こうべ}頭をもたげ、

「^{わらわ か ほとけ たけ ゆうふ}私は彼の^{さん}仏が岳の^{なんにわ}勇婦にははべらずかし。故郷は^{なにわ}難波にて、お三と呼ばれる者には^{どうぐんはや}べり。当郡早
^{つき おんなむしやがしらはなまど}月の女^{かしこ}武者頭^{どうりゅう}花的殿とはこの年頃親しき友ではべるから、此の度^{かしこ}彼処へ訪れて^{どうりゅう}逗留のつれづれに
^{ゆえ}稲荷祭りを^{はやつき}見にいでしに、故無く^{つか}絡め捕られたり。早月へ人を^{ふんみょう}遣わし問わせたまえば^{ふんみょう}分明ならん」
と^{ちん}恐る恐る^{あつまさ まこと}陳じけり。大箱が今^{さん}篤政に^{さん}真の名を告げずして、^{ぎ たきち}仮にお三と名乗りしは^{あつまさ}義太吉を害した
^{たた}る祟りを^{ゆえ}恐れる故なりけり。篤政これを^{あつまさ}聞きながら、「^{かつらのすけ}論より証拠」と云う事あり。「^{かつらのすけ}桂之介、さあ
いでよ」と^{かつらのすけ}呼び張る声と^{かつらのすけ}諸共に「^{ののし}承りぬ」と^{かつらのすけ}答えつつ、桂之介はしづしづと^{ののし}屏風の▼^{ののし}後ろより立ち
出て、大箱を見て^{ののし}指さし^{ののし}罵り、

「^{なんじ}汝は去ぬる日、^{ほとけ たけ}仏が岳にてまさしく我らと物云いしを早忘れしか。いかにぞや」と云うに大箱
ちっとも^{わだの}騒がず、

「^{わらわ か とりで さんしゅ}和殿はその折何と聞いたる。私は彼の^{わらわ か とりで さんしゅ}皆の山主にはあらず、^{かつらのすけ}通りがかりの旅人なりと^{かつらのすけ}告げ知ら
せしを何と^{かつらのすけ}聞きしか」と云はせも^{かつらのすけ}果てず、桂之介は^{かつらのすけ}からからと^{かつらのすけ}笑いつつ、

「^{よたりに さんしゅ なんじ かみくら}云えばとて、云われるものかな。その折の^か四人の山主の中で^か汝は上座をして、彼の^か者どもに^か敬わ
れたり。通りがかりの^{いっわ}旅人ならば、かくの如くなるべきや。まず^{いっわ}早ひどく^{いっわ}打ち懲らさずば、^{いっわ}なお偽
るにや^{あつまさ}あらんずらん」と云うに^{あつまさ}篤政は^{うなず}頷いて、

「^{ぞくふ}者ども早くその^{はくじょう}賊婦を打ち伏せて^{げち}白状させよ」と^{かつらのすけ}激しき下知に大箱は^{かつらのすけ}桂之介を^{うら}深く恨んで、
「^{わかしゅ}思うには^{いちごん}似ぬ若衆かな。我が一言の^{まごころ}真心にて^{あだ}救って事無く返したる^{ひどう}恩を^{しいごと}仇なる^{しいごと}非道の^{しいごと}誣言(作り事)
※。^げ実に直からぬ^{くみこ}心や」と云わせも^{くみこ}あえず^{そびら}組子らは大箱を押し伏せて^{そびら}背を^{そびら}ひどく打ちしかば、^{そびら}皮破
れ肉現れて、^{ちしお}血潮は^{しもど}鞭を染めにけり。

※誣言(しいごと): 事実を曲げて言うこと。作りごと。讒言(ざんげん)。

○さる程に大箱の^{しるべ}案内に付けられたる二人の^{しもべ}下部は^{はやつき}辛うじて早月へ^{はやつき}逃げ帰り、大箱の事をしかじか
と主の^{はなまど}花的に^{はなまど}告げにければ、^{はなまど}花的は聞いて^{はなまど}ひどく驚き、いかにすべきと思案をするに、大箱は世を
^{ゆえ}忍ぶその故あれば^{あつまさ}篤政の^{そこつ}粗忽を^{そこつ}責めん由も無し。彼をなだめて大箱を^{そこつ}救い取るに^{そこつ}ます事あらじと、
^{こころけつ}ようやく心決して^{にわ}俄かに^{しゅうそく}消息(手紙)を書きしたため、「^{わらわ}私が^{くろべ}友の^{くろべ}黒部氏。名をも^{くろべ}黒部と
呼ばれる^{ゆうべ}者、昨夜^{よいみや}稲荷祭りの^{つか}宵宮見よとて^{あやま}遣わせしに、誤ってそのもとへ^{あやま}絡め捕られしと^{くろべ}伝え聞きぬ。黒部
は^{くろべ}正しき女にて^{くろべ}露ばかりも^{くろべ}犯せる罪無し、願うは^{ぐんじ}同じ郡司の^{よしみ}好をもって、^{こなた}此方へ^{こなた}返したまえかし」
と^{いんざん}慇懃に^{つかい}筆に述べて、^{つかい}塚井^{つかい}二喜太と云う^{わかどう}若党にこの^{しゅうそく}消息をもたらし、^{くろべ}黒部の^{しゆくしよ}宿所へ^{つか}遣わしけり。
かくて^{くろべあつまさ}黒部篤政は^{はなまど}花的の^{おおかた}状を開き見て、^{つかい}怒る事^{つかい}大方ならず、その^{つかい}塚井に^{つかい}うち向かって、

「^{はなまと}花的是^{はなまと}は女ながらも親^{やくぎ}の役義^{むしやがしら}を受け継いで武者頭^{むしやがしら}を承り、この新川^{にいかわ}の郡司^{ぐんじ}なるに、いかなれば謀反人^{むほんにん}らに一味^{いちみ}して、我^{あざむ}を欺かんと欲するや。その賊婦^{ぞくふ}は自ら名乗って、難波^{なにわ}のお三^{さん}と云いつるに、この状^{くろべ}には黒部氏^{くろべ}と云うとあり。思うに我と同姓^{のし}にして哀れませんと謀るなり。明日^{あした}は富山^{つがい}へ訴えて、^{はなまと}花的にも思い知らせん。覚悟^{かくご}をせよ」と罵りつつ、その状^{のし}を引き裂き捨てて、塚井^{つがい}二喜太^{にきた}を追い返しぬ。

○かくて^{にきた}二喜太^{はなまと}は忙わしく、早月^{はやつき}の宿所^{しゆくしょ}へ走り帰って、篤政^{あつまさ}が云いし趣^{おもむき}、状^{てい}を引き裂きたる体たらくを^{はなまと}花的に^{はなまと}告げしかば、^{はなまと}花的是^{はなまと}は聞きながらひどく怒って、
「^{せひ}しからんには是非^{かしこ}に及ばず。ただちに^{なきなた}彼処^{なきなた}へ押し寄せて、大箱^{なきなた}を取り返さん。用意^{くみこ}をせよ」と苛立^{いらだ}って、腹巻^{はらまき}き取って身^{なみなた}を固め、薙刀^{なげ}を脇挟^{なみなた}み、馬^{うま}にひらりとうち乗れば、家の子^{くみこ}（家臣）、組子^{くみこ}三四十人、得物^{えいぶつ}、得物^{えいぶつ}を引き下げて、皆遅れじと続きけり。▼

かくて^{はなまと}花的是^{くろべ}は黒部^{くろべ}の屋敷^{いすこ}の表門^{わらわ}より、まっしぐらに馬^{うま}を乗り入れ、奥^{おく}まで響く声^{こゑ}を振り立て、
「^{くろべ}黒部^{あつまさ}篤政^{いすこ}は何処^{なになじ}に居る。私^{わらわ}は汝^{なんじ}に請う由^{まこと}あって、真^{まこと}の道^{つか}をもて云い違^{わらわ}わせしに、私^{わらわ}を女^{あなと}と侮^{あなと}って不法^{いふぽん}の返答^{いふたふ}一分^{いちぶん}立たず。よって勝負^{しやうぶ}を決せん為^なに時^{とき}を移さず向かうたり。さあさあいでよ」と呼び張り^{よび}たる猛^{たけ}き勢^{せい}いにをち恐れ^{あはれ}し主人^{あつまさ}篤政^{あつまさ}を始めとして、小姓^{こしょう}望月^{もちづき}桂之介^{かつらのすけ}、若党^{わかつとう}、組子^{くみこ}らに到るまで、慌^{あわ}てふため^{ため}に逃げ隠^{かく}れ、出会う者^での無^なかりしかば、^{はなまと}花的是^{はなまと}下知^{げち}して隈^{くま}も無く大箱^{おほひら}を尋ねさせしに、北^{きた}の方^のの物置^{もの置き}蔵^{くら}にひどく繋^{つな}がれて在^ありしかば、蔵^{くら}の網戸^{あみど}を打ち破^{やぶ}り、大箱^{おほひら}を助け出して縛^{いまし}めの縄^{なわ}を斬^きり捨てけり。

その時^{はなまと}花的是^{はなまと}は再び声^{こゑ}を振り立てて、
「^{くろべ}黒部^{あつまさ}篤政^{あつまさ}、確かに聞^きけ。此^{こゝ}の婦人^{むすめ}は我が客^{きやく}なれば、すなわち伴^{ばん}い帰^{かへ}るなり。なお又^{また}、富山^{とみやま}へ訴^うえて明^{あか}さ暗^{くら}さを立^たつべきぞ」と繰り返^{くりか}しつ罵^{ののし}って、予^{かね}て用意^{用意}の乗り物^{乗り物}へ大箱^{大箱}を助け乗^{のり}せ、静^{しずか}かに宿所^{しゆくしょ}へ帰^{かへ}りけり。

○さる程^{あつまさ}に篤政^{あつまさ}は大箱^{おほひら}を奪^{うば}い取^とられて安^{やす}からず思^{おも}いしかば、郎党^{ろうどう}の折角^{おれずみ}無^む三太^{さんた}と云^いう者^{まね}を招^{まね}き寄^よせ、
「^{なんじ}汝^{くみこ}は組子^{くみこ}百人^{ひゃくにん}ばかりを従^{したが}えて、早^{はや}く^{はなまと}花的是^{はなまと}の屋敷^{いすこ}へ押し寄^よせて、取^とり返^{かへ}されたる彼^かの賊婦^{ぞくふ}を^{はなまと}花的是^{はなまと}諸^{しよ}共に絡^かめ捕^とり、速^{すみ}やかに引^ひきもて来^こよ。功^{こう}によって重^{おも}く賞^{しょう}せん。さあさあせよ」と急^{いそ}がせば、無^む三太^{さんた}は一議^{いちぎ}に及^{およ}ばず、小^こ手^て脛^{すね}当^あてに身^みを固^かめ、栗毛^{あまた}の馬^{うま}にゆらりとうち乗^{のり}り、数^{あまた}多^くの組子^{くみこ}を従^{したが}えて早^{はや}月^{つき}を指^さして押^おし寄^よせけり。

その時^{はなまと}花的是^{はなまと}は家^{くみこ}の子^{おもてもん}（家臣）、組子^{くみこ}に表門^{あふもん}を守^{まも}らせて、その身^みも腹巻^{はらまき}き^{たざさ}に身^みを固^かめ、弓矢^{ゆみや}携^{たづさ}え表^{あふもん}の門^{かど}の二階^にの窓^{まど}を押^おし開^{ひら}き、寄^よせ手^て遅^{おそ}しと待^{まち}つ程^{ほど}に、近^{おれずみ}づき来^{きた}たる折角^{おれずみ}無^む三太^{さんた}。まっ先に馬^{うま}を進^{すす}めて、天地^{てんち}に響^{こゑ}けと声^{こゑ}を振りたて、

「^{むほんにん}謀反人^{いちみ}に一味^{はなまと}せし^{はなまと}花的是^{はなまと}一家^{いっけ}、一人^{ひとり}も漏^もらさず絡^かめ捕^とらん。その為^{ため}に黒部^{くろべ}殿^{どの}の御内^{みうち}にてさる者^{もの}ありと知^しられたる折角^{おれずみ}無^む三太^{さんた}が向^{むか}かうたり。さあさあいでよ」と呼び張^はれば、その身^みの兵^{つわもの}百人^{ひゃくにん}ばかりが鬨^{とき}をどつと作^{つく}りかけ、攻^{こう}め入^いらんとする所^{ところ}を待^{まち}ち設^たけたる此^{こなた}方^{つわもの}の兵^{かど}、門^{かど}押^おし開^{ひら}き立^たち塞^ふがって、追^おいつ返^{かへ}しつ戦^{いくさ}うたり。

その時^{はなまと}花的是^{はなまと}は物見^{ものみ}の二階^にに現^{あら}れ出^でて、
「^{こざか}小賢^{おきん}しや無^む三太^{さんた}。汝^{なんじ}の主^{あつまさ}の篤政^{あつまさ}ですら私^{わらわ}の相手^{あつまさ}には足^{たり}らざるに、絡^かめ捕^とらんなどとは眠^たれる龍^{たつ}の髭^{ひげ}を引^ひく、磯^{いそ}鼠^{ねずみ}に異^{こと}ならず。家^{いえ}に伝^{つた}えし我^{わが}が征^{せい}矢^やを受けても見^みよ」と呼び掛^かけて、よっ引^ひき固^かめ

ひゃうと射る、狙い違わず無三太は胸先ぐさと射抜かれて、馬より落ちて死んでけり。

大将討たれて黒部の兵は一支えも支え得ず▼、皆散り散りに逃げ走るを得たりと勇む味方の兵、思いのままに追い捨てて、勝ち鬨上げてぞ引き返す。

○さる程に花的是奥の小座敷に忍ばせ置きたる大箱をいたわって、

「私の思慮が足らずして、人目多かる宵宮の巷へ御身を出しやりし故、此の災いは起これるのみ。

しかれども此の事が公沙汰とならばなれ、私は言い訳無きにあらず。必ず恐れたまうな」と慰め

られても大箱は思いかねたる頭を傾け、桂之介の悪意の趣、篤政の非道の由を花的に物語り、

「私が此の所にある時は御身の言い訳立ち難かるべし。私は今宵夜に紛れ、仏が岳の砦へ行かん。

私が居らずなる時は事の証拠の無きにより、篤政いかにしひんとするとも、その云いでふは立つ

つべからず。さにあらずや」と囁けば、花的に聞いて眉をひそめて、

「宣う由は道理なれども、御身はひどく打たれたまいし鞭の傷の痛みもあらんに、夜道の歩行は

覚束なし」と云うを大箱聞きながら、

「痛みは背のみにして、足にはさせる傷も無し。供人などはなかなかに見咎められる仲立ちにならん。

只身一つにて行くべし」とて、その夕暮れより花的に宿所を密かに立ち出て、仏が岳を指して

急ぎけり。かかりし程に篤政は郎党折角無三太を花的に射殺され、兵どもは散り散りに逃げて

黒部に帰りにければ、いよいよ恨み憤り、速やかに富山の城へ訴えばやと逸りしを一人つくづく

と思ひ返せば、

「彼の賊婦を花的に取り返されて証拠無し。察するところ花的に今宵賊婦を仏が岳へ帰しやらんと

するならぬ。要こそあれ」と一人頷いて、俄かに組子二十人を八方へ手分けして、

「彼の賊婦が仏が岳へ帰り行く道に下待ちして絡め捕れ」とぞ下知しける。

かくとは知らず大箱は早月の宿りを発ち出て、十四五町行く程に現れ出るは黒部の組子ら、矢庭に

大箱を絡め捕り、その夜黒部へ引きもて帰り、主の篤政に告げにければ、篤政深く喜んで又、大箱

を土蔵の内に厳しく繋がせ置き、その明けの朝に使者をもて富山の城主にしかじかと事の由を訴えるに、

大箱を強いて仏が岳の賊婦の頭の難波千鳥のお三と書き記し、花的にも一味の由をつぶさに

密訴したりける。

此の時富山には踏通越中之介茂孝が在城して国中の賞罰を司どるに、その身は鎌倉の執権北条

義時の妻の従兄なりければ、自ずから勢いあって、国民はをさをさ恐れけり。かくて越中之介茂孝は

黒部の次官篤政の訴え文を見て密かに驚き、事の虚実を質さん為に女武者黄葉と云う者に事の心を

と説き示し、

「汝、彼処へ赴いて、篤政が申す由を問い質し、花的にいよいよ逆心あれば絡め捕って引き持て来

よ。捕りな逃がしそ」と下知しけり。さればこの黄葉は武芸の達人なるをもて、女武者に▼選まれ

し身の丈高き女なれば、世の人彼女をあだ名して空見山の黄葉とぞ云いける。茂孝が此の度、此の

黄葉を遣わす事は逆心の訴えある花的にも女なれば遙かに安かるべしとてなり。かくて黄葉は供人

とたり十人ばかりを従えて、急いで黒部の宿所へ赴き、主人篤政に対面して事の虚実を問いただすに、篤

政は証拠を取り言葉を巧みにて、大箱を仏が岳の賊婦と定め、花的にも野心分明の由を強いければ、

黄葉はしきりに嘆息して、

「彼の花的是名家の子孫にして女に稀なる弓執りなるに、いかなれば仏が岳の謀反人らと一味して鎌倉殿に弓を引くらん。是非に及ばぬ事ともなり。所詮押し寄せて絡め捕らんとせば、花的主従は死に物狂いに我が味方を数多損なうべし。私は彼処へ赴いて斯様斯様に云いこしらえ、彼女を此方へ伴い来らん。その時屈強の力士二三十人を幕の陰に隠し置き、合図を定め不意に起こって花的を絡め捕らすべし。その謀り事はしかじかなり」と事つまびらかに囁き示せば、篤政深く喜んで、早その用意をしたりける。

○さる程に花的是黒部の討手の頭人の折角無三太を射殺して、敵の雑兵を追い散らし、大箱を仏が岳へ落とし遣りし、その頃より篤政が自ら寄せ来るかとして両三日を待ちけれども、そよとの便りも無かりしかば、深く心にいぶかって引き籠もりつつ日を送るに、それにはあらず富山の城より女武者の黄葉が城主茂孝の使いとして来にければ、いぶかりながら出迎えて事の心を尋ねるに黄葉答えて、

「私が密かに来る由は踏通殿の内意によれり。そもそも新川の一郡は御身と黒部氏と支配したまうに、その仲睦まじからざる由、既にその聞こえあり。この儀はなはだしかるべからず、取り扱って和睦をさせよと踏通殿が命ぜられて、すなわち私を遣わされにき。御身は頼政卿の子孫にて女に稀なる武芸あり。且つその行いも直かるを踏通殿が予ねてより良く知って御座すれば、事に最肩に思われて、かかる内意のあるにこそ」と云うに花的是感服して、

「篤政が私を女とあなどり、萬我がままに振る舞えば、言い分無きにあらねども、茂孝の主がかくまでに宣う由をいかでか背かん。ともかくも計らいたまえ」と云うに黄葉頷いて、
「さらば私と諸共に只今黒部へ赴きたまえ。私が宜しく取り計らって、仲直りの盃を取り交わさせんと思うかし。さあさあ」と急がすにぞ、花的その儀に従って、やがて衣装を改めつつ、供人十人ばかり従えて、黄葉と諸共に黒部の宿所へ赴きけり。

その時篤政が出迎えて書院において黄葉をねぎらい、やがて盃をすすめしかば、黄葉と篤政に説き諭して、事初めの如く私が扱い人たれば、この後双方睦まじくして当郡を治めたまえと▼云いつつ、篤政と花的に盃を取り交わさせ、和睦既に調いければ、篤政はその盃を黄葉に差しにけり。その時黄葉は辺りを見回し、盃はたと投げうちて、「寄れや者ども」と呼び張りければ、幕屏風の後ろより数多の力士がおらむらと現れ出て組まんとするを心得たりと花的是左右に二人をかい掴み、投げ退けて身を起こす。程もあらせず、前後右左より折り重なり押さえて縄を掛けにけり。

花的是怒れる声を振り立てて、
「私に犯せる罪は無きに、黒部の讒言を受け入れて、手込めにせられし口惜しさよ」と云わせもあえず黄葉はからからと笑いつつ、

「愚かなり、花的。汝が仏が岳の謀反人に一味の事、証拠は既に現然なり。さあ彼の者を見せたまえ」と云うに篤政は心得て、生け捕り置きたる大箱に荒縄掛けて引き出せば、花的と大箱は互いに顔を見合わせて、只呆れたるばかりなり。

その時、黄葉は花的をきと睨まえて、
「不忠の賊婦はかかる上にもなお争わんと欲するや。仏が岳の賊婦の頭、難波千鳥のお三とやらんは先に汝が奪い返して密かに砦へ帰さんとしつる折、篤政殿の才覚にて組子をもって、その道に下待ちさせて絡め捕りぬ。かくまで証拠が分明なれば、これかれ共に時を移さず、富山の城へ行くべきのみ。私は予て茂孝主の密意を請けて、当所に赴き手軽く汝を絡めん為に事を和睦に託けて此の所へおびき寄せたり。今は逃れる道も無し。覚悟をせよ」と罵れば、花のおめたる気色も無く、

「さては早、先立って篤政が讒言して富山の城へ訴えしよな。しかりとも此の女は仏が岳の勇婦にあらず、元より訳ある事なれども今更ここにて争うも益無し。富山に至って、これらの由を申し開きが無きにあらねばともかくも計らわれよ。さりながら私も源家の末々にて、女ながらも親の跡を受け継いで半郡を司り、女武者の頭たるに衣装をはぎ取り荒縄かけて、引かれん事は無念なり。この儀を心したまいね」と云うに黄葉頷いて、

「まさしき言い訳あらんには罪はここにて定め難し。願いのまにまに用捨せん。その儀は氣遣いすべからず」と受け引いて、やがて篤政にしかじかと説き示し、花的をばそのままに網乗り物にうち乗せて雑兵数多に左右を守らせ、大箱をば徒(徒歩)※より引かせて組子にこれを守らせけり。

※徒(かち): ①乗り物を使わず歩くこと。②陸路に行くこと。③武士の身分の一つ。

その時黒部篤政は大箱を強いて仏が岳の賊婦と云いたて、そのあだ名さえ作り設けて難波千鳥のお三と書き記せし札を持たせ、小手脛当てに野装束して、▼栗毛の馬にうち乗りけり。かくて黄葉は乗り物に乗って、雑兵およそ百人ばかりを打ち従え、花的をうち乗せし網乗り物を真ん中に取り囲ませて大箱をその次に引かせ、黒部篤政に先を打たせて、富山を指して練り行きけり。

既にして道の程、二十四五町も来ぬらんとする頃、行く手に木深き林あり。此の林の内よりして怪しげなる男ども両三人があちこちに立ち現れて、しきりに此方をうかがい見たる。面魂がただならねば雑兵らはいぶかり恐れて、「あれはまさしく山賊ならん。いかがすべき」と囁き合って、皆々進みかねるになん。篤政も又、怖気立って後陣へかくと告げしかば、黄葉これを聞きながら、「そは何程の事あらん。私が瀬踏み※をして得させん。皆々続け」と云いながら、乗り物より立ち出て雑刀を脇挟み、先に進んでその林を走り抜けんとする程に、林の内より一手の軍兵が鬨をどつと作りかけ、現れ出たる三人の勇婦はこれすなわち別人ならず、仏が岳に名も高き珠簾の燕、艶素顔の雌雉、瀬那遣の腐鶏らなり。

※瀬踏み(せぶみ): ある物事をする前に、ちょっと試してみること。

三人ひとしく声高やかに、
「ここに来ぬる者どもは新川富山の士卒なるべし。茂孝は執権の権威を借りて、民を虐げ、不法の行い多かるを見真似に貪る郡司、庄官が罪無き者を罪なつて、己の功にせんと目論む邪は早知られたり。命惜しくばその縄付きを二人共に渡して去ね。異議に及ばば一人も通しはせじ」と呼び張れば、その手の軍兵三四百人がどつとおめいて競ってかかれる勢い当たり難ければ、篤政は捨て

むち
鞭打って、人より先に逃げたりける。

まいてや雑兵、組子らは一支えも支え得ず、網乗り物を▼かき下ろし、大箱さえうち捨てて、皆散り散りに逃げ走るを「汚し返せ」と呼び止める黄葉一人が踏み止どまって、燕、腐鶏、雌雉らに渡り合い縦横無碍に戦いしが、味方に続く兵無ければいかにして三勇婦を相手に久しく支ゆべき。ようやくただむき疲れて叶うべくもあらざるに、ここに一人討ち死にせんは無益にこそと思案をしつつ、隙をうかがい引き外して黒部を指してぞ逃げたりける。

さる程に花的是誰とは知らぬ助けの軍兵が林の内より現れ出て篤政を追い散らし、黄葉を責め立てるを乗り物の窓の隙よりまたたきもせず遙かに見て、仏が岳の勇婦らが大箱を救わんとて、来るにこそと推しにければ、日照りに萎れし玉苗が夕立雨に逢えるが如く、勢いたちまち勃然と乗り物の戸を蹴放って、網押し破り現れいでたる勇婦の力と勢いに縛めの縄はふっと千切れて、四段になってぞ落ちたりける。かかる折にも雑兵兩人がなお乗り物に付き添って、逃げも得やらず守りいたるが、此の体たらくに驚き慌てて組まんとせしを花的是左右へ引き付けかい掴み、力に任して投げ付けば、一人は石に頭を砕かれ、一人は株に脇腹をつん裂かれてぞ死んでける。その隙に燕らは大箱の縛めの縄を手早く解き捨て、つつが無きを祝しつつ、いと懇ろにいたわれれば、大箱喜び、且ついぶかって、

「御身達はいかにして、我が身にかかる災いを何時の程にか探り知り、ここに救いたまわりしぞや」と問えば燕は微笑んで、

「去ぬる日黒部、早月の稲荷祭りを私の手下の雑兵らの両三人と見に行きて、その夜御身が篤政に捕られたまいし体たらくを目の当たりに見たりとて、驚き慌て走り帰ってしかじかと告げれば、我々三人が談合して救い取らんとするに。心利きたる雑兵を黒部早月の方へ遣わして、事の様子をうかがわせしに、花的是殿の武勇にて早く御身を奪い返して私の方へ落したまいし、その夜又彼の篤政が組子を道に出し置いて、再び御身を捕らえし由を見つつ聞きつつしかじかと▼砦へ注進したるにより、尚も忍びの者をもて事の様子をうかがわせ、富山の城より黄葉が来つつ花的是殿をたばかって絡め捕りたる事の趣、御身諸共富山の城へ引きもて行かんとする由をつぶさに探り知りしかば、ここに救い取らんとてかたの如くに謀りしなり」と告げるに大箱喜んで、三勇婦らの志を感ずること大方ならず。やがて花的是に由を告げ、引き合わせれば花的是も思い掛けなき再生の喜びを述べ、恩を感じて、

「かかる上は今更に帰らんとする家も無し。仏が岳に身を寄せて、共に力を尽くすべし」と云うに喜ぶ三勇婦らは大箱、花的是を伴って軍兵を引きまとめ、仏が岳の砦へ帰って喜びの酒宴を設けて、大箱、花的是をもてなしけり。

かかる所に重立ちたる兵十人ばかりが黒部の次官篤政を生け捕って、縁側近く引きもて来て、「我々予て玉簾の君の御指図に従って、黒部の方へ走り抜け、木の間草むら陰に伏し隠れ、落ち行く敵の大將を生け捕らんとて待つ程に、果たしてこの篤政が馬を走らせ只一騎で家路の方へ逃げ行く所を我々たちまち一度に起こって、熊手をもってかけ倒し、ひしひしと縛めて引き持て帰り候なり」と告げるに喜ぶ大箱は燕らが残る方無きこの日の手配りを誉めて十人の兵をねぎらい、端近く進み出て篤政にうち向かい、彼が桂之介に迷わされて咎無き者を賊としいたる邪智奸悪の計らいをしきりに責めて止まざりしを燕は押し止め、

「春雨の刀自、無益の事なり。この篤政は博士振って口に聖賢の書を誦んじながら、賢を嫉み民の

油を絞^くり、身を肥^すやしたる曲^{こう}者^{はね}なり。只速^{むく}やかに頭^{はな}を刎^むて、悪^{はな}の報^まいを知らしむべし」と云^{はな}うに花的^{はな}に進^まみ出^でて、

「しからんには篤^{あつ}政^{まさ}は私^{わらわ}に首^{あな}を打^なたせたまえ。彼^{わらわ}は私^{あな}を女^{あな}と侮^{あな}り、この年頃おのがま^{あな}まに立^{あな}ち振^{あな}る舞^{あな}いしのみならず、▼遂^{あな}には私^{わらわ}を失^{あな}わせ新^{あな}川^{あな}の一^{あな}郡^{あな}をおのれ一^{あな}人^{あな}で領^{あな}せんとして、春^{あな}雨^{あな}の刀^{あな}自^{あな}さえおとし^{あな}れたる此^{あな}度^{あな}の讒^{あな}言^{あな}。既^{あな}に我^{あな}が身^{あな}をかくの如^{あな}くになせしはこれ皆^{あな}彼の業^{あな}なり。いでいで」と云^{あな}いかけて、刀^{あな}を引き下^{あな}げ縁^{あな}側^{あな}より下^{あな}りて後^{あな}ろに立^{あな}ち巡^{あな}れば、篤^{あつ}政^{まさ}は身^{あな}を縮^{あな}まして、

「花的^{はな}の刀^{あな}自^{あな}、今^{あな}更^{あな}に後^{あな}悔^{あな}その詮^{あな}無^{あな}けれども、同^{あな}役^{あな}の好^{あな}に愛^{あな}でて命^{あな}を助^{あな}けたまえかし」と云^{あな}わせもあえず花的^{はな}のはからからとあざ笑^{あな}い、

「武^{あな}士^{あな}に似^{あな}氣^{あな}無^{あな}く、この期^{あな}に及^{あな}んで恥^{あな}を知らざる痴^{あな}れ者^{あな}なり。誰^{あな}か汝^{あな}を許^{あな}すべき。観^{あな}念^{あな}せよ」とひらめかす刃^{あな}の下^{あな}に篤^{あつ}政^{まさ}の頭^{あな}ははたと落^{あな}ちにけり。

○これはさて置^{あな}き、黄^{あな}葉^{あな}は篤^{あつ}政^{まさ}が逃^{あな}げ足^{あな}早^{あな}くて味^{あな}方^{あな}に続^{あな}く 兵^{あな} 無^{あな}ければ、三^{あな}勇^{あな}婦^{あな}の矛^{あな}先^{あな}を支^{あな}えかね、引^{あな}き返^{あな}して黒^{あな}部^{あな}の陣^{あな}屋^{あな}に立^{あな}て籠^{あな}もり、その日^{あな}早^{あな}打^{あな}ちの使^{あな}いをもて、すなわち事^{あな}の趣^{あな}を富^{あな}山^{あな}へ注^{あな}進^{あな}したりける。

○さる程^{あな}に踏^{あな}通^{あな}越^{あな}中^{あな}之^{あな}介^{あな}義^{あな}孝^{あな}は黄^{あな}葉^{あな}の注^{あな}進^{あな}を聞^{あな}き、ひどく驚^{あな}き、

「仏^{あな}が岳^{あな}の賊^{あな}婦^{あな}らの事^{あな}はその聞^{あな}こえありと云^{あな}えども、奴^{あな}等^{あな}は女^{あな}の事^{あな}なればなおざりに見^{あな}て捨^{あな}て置^{あな}きしに、花的^{あな}さえも逆^{あな}徒^{あな}に組^{あな}みして、上^{あな}を恐^{あな}れぬ此^{あな}度^{あな}の乱^{あな}妨^{あな} (強^{あな}奪^{あな})。今^{あな}はしも許^{あな}し難^{あな}し。討^{あな}っ手^{あな}の士^{あな}卒^{あな}を差^{あな}し向^{あな}けて、絡^{あな}め捕^{あな}らせずばあるべからず。此^{あな}の討^{あな}っ手^{あな}の大^{あな}将^{あな}には誰^{あな}をがな使^{あな}わすべき」とて定^{あな}めかねつつ思^{あな}う様^{あな}、

「・・・よしや彼^{あな}の賊^{あな}婦^{あな}らは兇^{あな}勇^{あな}男^{あな}に優^{あな}るとも、名^{あな}ある武^{あな}士^{あな}を討^{あな}っ手^{あな}とせば、鶏^{あな}を裂^{あな}くに牛^{あな}の刀^{あな}を用^{あな}いるに似^{あな}たるべし。要^{あな}こそあれ」と思^{あな}案^{あな}をしつつ、先^{あな}に鎌^{あな}倉^{あな}より付^{あな}けられたる女^{あな}武^{あな}者^{あな}の総^{あな}頭^{あな}の秦^{あな}名^{あな}と呼^{あな}べる勇^{あな}婦^{あな}を招^{あな}いて、事^{あな}しかじかと聞^{あな}こえ知らせて仏^{あな}が岳^{あな}の賊^{あな}婦^{あな}ら^{あな}を退^{あな}治^{あな}の大^{あな}将^{あな}にぞしたりける。そもそも秦^{あな}名^{あな}は近^{あな}き世^{あな}の巴^{あな}、板^{あな}額^{あな}にも劣^{あな}らざる万^{あな}夫^{あな}不^{あな}当^{あな}の力^{あな}量^{あな}あり。その性^{あな}烈^{あな}火^{あな}に異^{あな}ならず、もの^{あな}にこらえぬ勇^{あな}婦^{あな}なれば、世^{あな}の人^{あな}彼^{あな}女^{あな}をあた名^{あな}して▼迅^{あな}雷^{あな}秦^{あな}名^{あな}と云^{あな}いけり。かくて茂^{あな}孝^{あな}は屈^{あな}強^{あな}の兵^{あな} 五^{あな}百^{あな}人^{あな}を秦^{あな}名^{あな}に授^{あな}けて出^{あな}陣^{あな}の盃^{あな}を取^{あな}らせ、鎧^{あな}、薙^{あな}刀^{あな}を引^{あな}出^{あな}物^{あな}として、「速^{あな}やかにうち向^{あな}かい、功^{あな}をたてよ」と命^{あな}ぜしかば、秦^{あな}名^{あな}は欣^{あな}然^{あな}として言^{あな}承^{あな}け (返^{あな}答^{あな}) しつつ、その日^{あな}富^{あな}山^{あな}を出^{あな}陣^{あな}して、次^{あな}の日^{あな}仏^{あな}が岳^{あな}の麓^{あな} 近^{あな}く馬^{あな}を進^{あな}め要^{あな}害^{あな}の地^{あな}を選^{あな}んで、ま^{あな}ず早^{あな}陣^{あな}を取^{あな}りたりけり。

○かかりし程^{あな}に仏^{あな}が岳^{あな}には物^{あな}見^{あな}の兵^{あな} がしかじかと早^{あな}くも砦^{あな}へ告^{あな}げにければ、花^{あな}的^{あな}これ^{あな}を聞^{あな}きながら、

「秦^{あな}名^{あな}は武^{あな}芸^{あな}勇^{あな}力^{あな}の類^{あな}い稀^{あな}なる女^{あな}なれども、短^{あな}氣^{あな}にして謀^{あな}り事^{あな}無^{あな}し。かかれば力^{あな}をもて争^{あな}うべからず、只^{あな}智^{あな}をもつて征^{あな}すべし」と云^{あな}うに大^{あな}箱^{あな} 領^{あな}いて、「さらば斯^{あな}様^{あな}斯^{あな}様^{あな}に謀^{あな}るべし。さあ用^{あな}意^{あな}したまえ」と云^{あな}うに 燕^{あな}、腐^{あな}鶏^{あな}、雌^{あな}雉^{あな}は「しかるべし」と答^{あな}えつつ、五^{あな}百^{あな}騎^{あな}を五^{あな}手^{あな}に分^{あな}かちて百^{あな}騎^{あな}には砦^{あな}を守^{あな}らせ、その余^{あな}各^{あな}々^{あな}手^{あな}分^{あな}けを定^{あな}めて用^{あな}意^{あな}速^{あな}やかに調^{あな}いければ、女^{あな} 弓^{あな}取^{あな}花^{あな}的^{あな}は華^{あな}やかに鎧^{あな}つつ馬^{あな}にうち乗^{あな}り、兵^{あな}を百^{あな}人^{あな}ばかり従^{あな}えて麓^{あな}に下^{あな}り陣^{あな}を敷^{あな}き、寄^{あな}せ来^{あな}る敵^{あな}を待^{あな}ちたりける。しばらくして寄^{あな}せ手^{あな}の陣^{あな}より、しきりに寄^{あな}せ太^{あな}鼓^{あな}を打^{あな}ち鳴^{あな}らす程^{あな}こそあれ、大^{あな}将^{あな}の迅^{あな}雷^{あな}秦^{あな}名^{あな}は小^{あな}桜^{あな} 緘^{あな}のこぐそくもえさじよろいひたれすそながきくだすじがねいなしうちえほしいくびえんげつおおなぎなた小^{あな}具^{あな}足^{あな}に萌^{あな}黄^{あな}地^{あな}の鎧^{あな}直^{あな}垂^{あな}を裾^{あな}長^{あな}に着^{あな}下^{あな}して、筋^{あな}金^{あな}入^{あな}ったる後^{あな}打^{あな}鳥^{あな}帽子^{あな}を猪^{あな}首^{あな}に頂^{あな}き、円^{あな}月^{あな}の大^{あな}薙^{あな}刀

を脇挟み、青斑の三歳馬に雲渦鞍置いてゆらりとうち乗り、屈強の兵五六十人を馬の左右に従えて真っ先に乗り出せば、私が岳の陣中にも攻め鼓を打ち鳴らし、女弓取花的是緋緘の鎧に紺地の直垂れを着下し、二十四さしたる征矢を筈高※に負いなして、重藤の弓の握り太なるを脇挟み、連銭芦毛の駿馬にうち乗って、兵数多左右に従え進み出て、弓取り直して馬上遙かに頭を下げ、

「珍らしや秦名の刀自、▼私は黒部篤政に讒言せられて、不思議の罪人となりしかば、止む事を得ず身を逃れ、しばしこの山に籠もったり。元より京にも鎌倉にも背きまつらんと欲するにあらず。

この由よろしく申したまえ」と云うを秦名は聞きながら、

「花的などで大胆なる。汝は名家の子孫として女ながらに新川半郡の郡司たり。且つ女武者の頭たれば御恩に不足はあるまじきに、この山の賊婦らに一味して逆謀を企てたる天罰、いかでか逃るべき。速やかに馬より下りて縛めの縄に掛かれ。さらずば我が此の薙刀にて素頭を打ち落とさんず」と息巻き猛く罵るを花的聞いてあざ笑い、

「愚かやな秦名。汝は討つ手の大將なれば、私がまげて礼儀を尽くすは逆心無きを示さん為なり。しかるを自ら高ぶって、私を恥ずかしめんと欲するか。その儀ならばいで物見せん」と云いつつ馬を走り寄せれば、秦名は怒りに耐えずして、馬を駆け寄せ、薙刀を水車の如くひらめかし、面も振らず斬ってかかるを花的得たりと大刀抜きかざし、しばらく挑み戦いしが、偽り負けて引き返せば、秦名はすかさず馬を飛ばして、なお逃さじと追っかけたり。その時花的是持つたる刃を鞘に納めて、弓に矢番い引き固め、背向になってひゃうと放せば狙い違わず秦名の烏帽子の鉢金を射削って、その矢は遙かに飛び散ったり。さすがの秦名も此の矢一つに肝を潰し、舌を震って、押し続いても追わざれば、花的是静々と士卒を従え退くを秦名は再び追わんとて、私が岳に攻め昇れば、何処か行きけん花的も士卒も見えずなりにけり。

かかる所に東の尾上に鐘、太鼓の音が遙かに聞こえて、敵の大軍彼の所より討つ手がいつると覚えしかば、秦名はしきりに士卒を進めて、道無き道を切り開き、まっしぐらに馳せ付けて、東の山辺に押し寄せ見れば、鐘、太鼓の音は聞こえずなつて敵は一人も在らざりけり。かかりし程に一人の雑兵があえぎあえぎ走り来て、

「只今西の尾上に当たって、又、鐘、太鼓の音が起こったり。御用心候えかし」と告げるを秦名は聞きながら、「さては敵は西にあり。▼者ども進め」と馬を飛ばして西の方へ引き返せば、いとも険しき山坂の木を切り倒し道を塞いで、容易に越ゆべき由の無ければ、秦名はいよいよ苛立って、士卒に下知して切り塞ぎたる木を除き石を退け、辛くして西の山辺によち登りて辺りを見るに、鐘、太鼓の音は更なり、ここにも敵が在らざれば疑い迷って佇む程に、雑兵一人が又走り来て、

「敵は北の方に在りとおぼしく、木の間林の内に旗指物がひらめいて攻め太鼓の音かまびすしく、山彦に響いて聞こえ候」と息付きあえず注進す。秦名はその性烈火の如く、物にこらえぬ勇婦なれば心しきりに苛立って、

「しからば北の敵を討つべし。皆々進め」と真っ先駆けて、北の尾上に押し寄せるに、又、大木を倒しかけ、行く手の道を切り塞ぎしを秦名は又、士卒に下知して、ようやく道を切り開かせ、その所に至って見るに、ここにも敵はあらざりけり。「此はいかに」と疑い迷って、引き返さんとする折から雑兵一人がまた走り来て、

「只今南の山の上に花的是大箱と燕ら諸共は幕を打ち毛氈を敷き設け、盃をめぐらせて、笑い楽しんで候なれ」と告げるに秦名は喜んで、

「此の度は賊婦らを一人も漏らさず討って捕らん。逃げ逃げ」と馬引き返し、南の方に赴きつつ、尾上遙かに見上げれば、実に雑兵の告げたる如く、花的是大箱らと諸共に酒うち飲みて此方を見つつ、誇り顔にしばしば指さし笑いしかば、秦名は怒りに耐えずして攻め上らんとする程に、山の幕の陰より兵数多現れ出て、手に手に石を投げ下ろし、木を切り倒して防ぐになん。全て寄せ手の兵は石に打たれ木に押され、死する者も少なからず、手負いも過半に及びしかば容易く登るべうもあらず。とかくする程に日は早や西の山の端に沈み果て、山道暗くなりたれども秦名は尚も退かず、松明を灯させ篝火を焚かせ、士卒に腰兵糧を使わせて、再び攻め上らんとする間も無く、たちまち山の上に当たりて合図の烽火がボンと音してきらめき昇る程こそあれ、山水どっとみなぎり来て、寄せ手の士卒を押し流す。勢い防ぐべうもあらざれば、「此はそもいかに」と驚き騒ぐ、周章(うらたえ)大方ならざりければ、此の所の三方は峨々たる山にて只一方は谷なりけり。最も低き所なるを山の腰をうち巡る山川をせき止めて流しかけたる事なれば、寄せ手はたちまち水に溺れて死する者も少なからず。かかる所に山の上より攻め太鼓を打ち鳴らし、雌雉、腐鶏が二騎相並んで士卒を進めて攻め下れば、寄せ手はいよいよ辟易して、ようやく水を逃れし者は逃げんとしつつ度を失って、谷底へ転び落ち伏し重なって死する者、その数を知るべからず。僅かにつつが無かりし者は残らず敵に生け捕られ、秦名は一騎になりけり。

※等高(はずたか): 籠(えびら)に入れた矢の矢筈が頭上高く突き出ている。

○されば秦名は捨て鞭鳴らして疲れし馬を乗り走らして麓を指して退く程に、敵は隙間無く追いかけて、「秦名を逃がすな、虜にせよ」と声々に呼び張りければ、秦名はいよいよ心慌て、しきりに馬を走らせしに、忽然として人馬諸共に落とし穴へ落ち入りけり。その時敵の兵らはむらむらと走り集って熊手を持って秦名を引き上げ、大刀、物の具を剥ぎ取って、ひしひしと厳しく縛め、馬をも穴より引き上げて、仕合良しとさざめきつつ引いて砦へ帰りけり。そもそもこれらの謀り事は先に大箱と花的是が示し合わして、山川の水をせき止めて、秦名が逃れて帰るべき一筋道に落とし穴を設け置き、遂に秦名を生け捕りけり。▼さる程に大箱、花的是、燕、腐鶏、雌雉らと諸共に衆議廳と名付けたる大座敷に団欒(団らん)して彼の兵らが訪れを待つ程に、しばらくして兵らは生け捕りたる寄せ手の大将の秦名の縄を取りつめて縁側近く引き据えれば、花的是は忙わしく端近く立ち出て、兵らをねぎらって、手づから秦名の縄を解き捨て引いて上座に伴いて、懇ろに問い慰め、「迅雷の刀自、許したまえ。雑兵らが人を得知らず、辱め参らせたり。無礼を許したまえかし」と云えば、大箱、燕、腐鶏、雌雉も進み寄り、諸共に対面して、その日の疲れを労るにぞ、秦名は恥たる面持ちにて、

「私(わらわ)は敗軍の大将なるに、各々などで敬いたまう。心得難くはべるかし」と云うに花的是の微笑んで、「刀自の武勇は世に聞こえ、心正しき賢女なるに、誰か敬いはべらざるべき。我々はもとより逆謀無し。篤政の讒言にて無実の罪を得たりしかば、その災いを避けん為にしばし此の山主らに身を寄せたり。されば難波のお三と云いしはその名世上に隠れ無き、難波の書役大箱殿なり。篤政に捕らわれし時、その真の名を告げざりしは斯様斯様の事により、義太吉と云う者を害せし祟りを恐れし故なり。さて又ここにはべる三勇婦は城の資持、比企の能員の余類なり。元より武勇の女たちなるに、先亡の余類なれば身を置くに所無く、これ又、この山に籠もって赦免の時を待つ者なり。しかるに越中之介茂孝主は鎌倉の執権義時殿の威を借りて、民を虐げ、家を肥やして、私の行い多か

り。まいて黒部篤政の輩、その下風に立つ者が邪、不法ならぬは稀なり。この儀を察したまえかし」と云うに秦名は嘆息して、

「さては左様にはべりしか。私は偏に篤政の訴えを真として、あくまで御身を憎みしは思いの足らぬ故にこそ。許したまえ」と打ち詫びて、又、他事も無く見えしかば、大箱、燕らは喜んで、俄かに酒宴を設けつつ、をさをさ秦名をもてなせども秦名はこれを楽しとせず、しばしば盃を呑みて云う様、

「各々、私を愛したまえば早く富山へ帰したまえ。私は尼將軍の御付け人として、この兩三年北国に居り、女武者の総頭をさえ承りてはべるに何でにしばしも留まるべき。さあさあ帰したまえかし」と云うに大箱頷いて、

「迅雷の刀自、▼かくまで帰らんと宣うをいかでか久しく留めんや。さりながら今日終日の戦いに山路を奔走したまいければ、さこそは疲れたまいけめ。なれども御身は忠義の為に厭いたまわぬ由もあらんが、痛ましきは彼の馬なり。御身を乗せて今日一日、山坂をのみ走りにければ名馬と云うとも疲れたるべし。今宵は馬の足を休めて、飽くまでに馬草を飼わせ、明日はつとめて山を下って富山へ帰りたもうとも、さまで遅しとすべからず。今宵はここに明かしたまえ」と花的、三勇婦らと諸共に留めて懇ろにもてなしければ、秦名は遂に否みかね、僅かに心を安くして盃を受けうちくつろいで、その夜更たくる頃、設けの臥所に案内をせられて、しばしが程とて微睡けり。

元より疲れし事なれば、秦名はその明けの朝の巳の頃に起き出て、大箱、花的に別れを告げ、「私の大刀、物の具を返したまえ」と催促せしを大箱らは聞きながら、

「御身を止めるにあらねども、まず朝飯を参らせん。さのみな急ぎたまいそ」とて客座敷へ伴って、燕らの三勇婦と諸共に酒食をすすめて、いと懇ろにもてなせども、秦名はしきりに催促して、大刀、物の具を請い求め、帰らんとのみ急ぎしかば、大箱らは留めかねて大刀、物の具、烏帽子、薙刀、馬をさえ元のままに雲渦鞍置いてぞ返しける。

○かくて秦名は物の具に身を固め、馬にうち乗り、山を下って、しきりに道を急ぎつつ、富山の城に走り着き、進み入らんとしたれども、城門を固く閉ざして入るべうもあらざれば、橋の辺で声を振り立て、「人々、門を開けたまえ。秦名が帰りはべりたり」と呼ばせもあえず、城中に合図の太鼓が打ち鳴らされ数多の旗を立て連ね、鎧いたる武者が幾人とも無く櫓の内に立ち現れて、矢を射かける事しきりなり。

秦名はこれに驚いて、射向の袖をかざしつつ、

「此はいかに、思い違えて、かくは私を射るやらん。粗忽をすな」と押し止めれば、城の兵声々に、

「秦名、汝は仏が岳の賊婦らに降参して、昨夜夜更けてここへ押し寄せ、火を放ち乱暴して、曉に退きしに、今更に又、欺かんとて再び来る肝の太さよ。あれ射て取れ」と罵って、射る矢は雨の如くなれば、秦名は遂に争いかねて心ならずも引き退き、城下の町を見渡すに実にも昨夜此の所に戦いの在りしと覚しく所々が焼き払われて、討ち死にしたる者の亡骸がなお横たわってありしかば、いよいよ疑い迷いつつ、行くとは無しに元来し道へ一里余り帰れども、今更に身の寄る辺無ければ自害をせんとし思い定めて、道の辺の草を折り敷き、物の具を脱ぎ捨てて、鎧通しを抜き放ち、

腹へ突き立てんとしてけるが、たちまちに思い返せば、ここにて死しては犬死になり。京鎌倉の政治
乱れて、佞人※時を得たりける。この時忠義の為に▼死すとも誰か哀れと思うべき。災いをしばらく
く避けて赦免の時を待たんには、佞が岳の砦の他に身を寄せん所無し。アアしかなりと一人語りて、
脱ぎたる鎧を再び着て、乗り捨てたる馬にうち乗り、まっしぐらに走らせてその夕暮れに佞が岳の
麓まで帰りしかども、大箱、花的らが留めしを固く否みて出て行きしにおめおめとして彼の人々に
再び面を合わせる事は今更に面目無ければ、ことわざに云う敷居より高き山路を上りかね、打ち見
上げつつ佇む程に、大箱、花的、燕らは数多の雑兵を従えて山を下り相迎えて、
「此は秦名の刀自、待ちかねたり。いざ此方へ」と誘って、やがて砦へ誘いつつ、酒宴を設けて
もてなすにぞ。秦名は富山の城にて在りし趣を物語り、
「思い掛けなく茂孝主に疑われて、今更に帰るべき家が無くなりたれば、しばしこの身を寄せんと
て、おめおめとして再び来たり。面目も無き事にこそ」と云うに花的微笑んで、
「その儀は予て春雨の刀自と私が計らって、御身に似たる女武者に昨夜御身の鎧を着せ、御身の
馬にうち乗せて、兵二三百人と諸共に山を下して富山へ遣わし、我は迅雷の秦名なり。先には
不慮に敗軍して敵に降参したるにより、佞が岳へ一味の手始め、城を屠らん為に来れり」。

※佞人(ねいじん): 心がよこしまで人にへつらう人。

傾城水滸伝 第七編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

「皆々、いでよ」と呼び張って焼き討ちしつつ攻め付けるに、城方に見覚えある物の具、薙刀、
乗った馬まで全て御身の出で立ちなれば、城兵はひどく驚き、
「さては秦名は敵になり、此の城を攻めるぞや。乗りな取られてぞ、皆防げ」とて木戸押し開いて
打っていずるを思いのままに攻め破り、良き潮合いに静々と引き退いて砦へ帰りたり。
ここをもて今日も又、御身を敵ぞと心得て、城方より矢を射かけ討ち取らんとしたるなり。
「我々かくまで謀りし由は初めはいかにもして御身を留めて味方にせんと思うことしきりなれども、
御身は既に心強く留まりたまう気色無ければ、止む事を得ず、分捕りしたる御身の物の具、馬をも
て偽武者を作り遣わし、方の如くに計らいぬ。許したまえ」と詫びしかば秦名はしばし呆然と始め
て夢が覚めたる如く、
「かくまでに私の事を思いたまわる各々方の志は黙止難し。私の親は世を去って、夫も無く子
も無ければ萬の上に後ろ安かり。今よりここに留まって、知己の力を尽くすべし」と云うに皆々喜
んで大方ならずもてなしけり。

○その時大箱は左右を見返り、

「先に各々の助けによって、黒部篤政を生け捕って、既に恨みを返せしかども、第一の発頭人たる彼
の望月桂之介は黒部の陣屋に居るならん。黒部を攻めて桂之介を生け捕る手段がありもやるか」
と問うを秦名は聞きながら、
「黒部の陣屋を攻めんとならば幸いの事がはべるなり。彼処を守る黄葉は私の武芸の弟子にはべり。

わらわがまず黒部に至って密かに黄葉に説きすすめれば、ちっとも刃に血塗らずして桂之介らを生け捕るのみならず、兵糧、軍用金に事足るべし。この儀はいかが」と説き示せば大箱らは喜んで、「その儀、真にしかるべし。早く彼処へ赴きたまえ。我々も又、兵らを従えて、引き続いて行きはべらん」と云うに秦名は心得て、再び馬にうち乗りつ、黒部の陣屋に赴いて門を開けと呼び張りければ、▼木戸を守る軍兵らは物見の窓より覗き見て、秦名なりと知りたればやがて一人が走り行き、黄葉に注進す。その時黄葉は木戸を開かせ出迎えて、秦名を一問に請じつつ、戦の勝負を尋ねるに秦名は答えて、「私の運が拙くして、鈍くも敵の謀り事に陥れられ遂に虜となりしかど、斯様斯様の事により逃れて富山へ立ち帰りしに、城中より矢を射かけられて入るべうもあらざりき。その故は斯様斯様と大箱らの謀り事をつまびらかに説き示し、これにより今更に寄る辺の船の舵を絶えて詮術も無くなりしかば、仏が岳へ赴いて彼の勇婦らを頼みたり。しかるに今、仏が岳には彼の世の中に隠れ無き、賢女春雨の大箱あり。そもそもその大箱は博く愛して人を救うに、いささかも財を惜しまず、実にこれ類い稀なる女君子なり。先に花的の宿所に在りし時、過って篤政に捕らえられ、難波のお三と名乗りしは義太吉を害したる事の祟りを恐れし故なり。近頃京も鎌倉も、その政治は亀菊と尼御台政子よりいでて行く末とても頼もしからず。和女郎も早く志を改めて大箱殿に従いたまえ。これらの由を告げんとて、一人ここへは来るなり」と云うに黄葉は驚き歎じて、「さては難波千鳥のお三と云われしは予てその名を伝え聞きし、大箱の刀自ではべりしか。既にかくの如くならば御身の意見に従わざらんや。ともかくも計らいたまえ」と世に勇ましく答えけり。

○さる程に大箱は雌雄と兵半ばを山に留めて砦を守らせ、花的、燕、腐鶏と諸共に数多の雑兵を従えて黒部の陣屋に来にければ、黄葉は秦名と共に木戸の辺まで出迎えて、やがて書院に誘って見参の礼儀を述べ、燕らにも名乗り合って、一味の由を告げにければ、人々深く喜びけり。

その時、花的が進み出て、「佞人の黒部篤政は先に生け捕り頭を刳しが、未だ桂之介を得ず。黒部の宿所へ押しかけて、彼奴らを生け捕るべし」と云うに燕、腐鶏はいち早く膝を進めて、「その儀は我々兩人に打ち任したまえかし」と云いつつ、やがて四五十人の雑兵を従えて、その宿所をお取り巻いて主の篤政を見習って、年頃民を虐げたる悪人は皆誅戮して善人は一人も害せず、されば大箱は兵らに下知を伝えて、民百姓を驚かさず、まず花的の眷属を引き取らし、軍用金と兵糧をのみ数多の小荷駄に積み上し、黄葉を伴って花的らと諸共に仏が岳へぞ帰りける。

○かかりし程に燕は遅ればせに帰り来て、「私は▼腐鶏と諸共に黒部の輩を誅戮せしに、桂之介は何処か行きけん。討ち漏らせしこそ口惜しけれ」と告げる言葉も終わらぬ折から腐鶏も又、駆けて来て、「私は彼の桂之介をいち早く引き捕らえ、乗り物にうち乗せつつ、よくいたわって伴い来たれり。此の度はこの少年を私の小姓にたまえかし」と云うに大箱苦笑いして、「瀬那遣の刀自、私が云う由を聞きたまえ。篤政が民を虐げて、遂にその身を殺せしも桂之介に迷いし故なり。しかるを御身も又、更にその少年を愛したまえば、災いそこに起こるべし。身に大望ある者が仇なる男妾などをものして、色好みの譏りを引かんや。桂之介のみが良き若衆にはあ

らず。私はこの後、心を掛けて良き男を仲立ちせん。事一度口よりいでは四つの馬も追い難し※。この儀に相違ある事無ければ、その少年は捨てたまえ」とて言葉を尽くして諫めるものから、腐鶏はなお心迷って従うべくもあらざれば、燕は苛立って、

「およそかくの如き悪少年を助け置いて何にせん。まいて春雨、女弓執兩刀自の仇なるをや。天罰思い知らせん」と云いも終らず抜き打ちに桂之介の細首を水もたまらず討ち落とせば、血潮がさつとほとばしり、軀はだうと倒れけり。

その時腐鶏はひどく怒って、

「此は理不尽なり。燕、春雨の刀自だにも欲しいままにしたまわざりし、桂之介をおのがままに斬り殺す事やはある。恨みの段平※受けて見よ」と息巻き猛って刃をうち振り、斬らんとせしを雌雉が押し隔て抱き留めて言葉せわしくなだめれども、腐鶏は聞かずして、身をもがき声を振り立て、「離せ、離せ」と叫びけり。

※駒馬(しば)も追う能(あた)わず：一度口に出せばもう取り返しがつかないたとえ。

※段平(だんびら)：幅の広い刀。また、刀。

その時大箱は進み寄り、理せめて腐鶏を諫める事始めの如く、

「私がこの後、男を見立てて仲立ちせんと受け引きたれば、桂之介の事は思い捨て、玉簾の刀自と和睦したまえ。由無き恨みに同士討ちせば、世の物笑いにならんのみ」と云うに花的、秦名、黄葉、雌雉も言葉を添えて様々になだめしかば、腐鶏は理に責められて、刃と共に怒りを納め、遂に燕と和睦して事早無事に収まりけり。かくて燕は雑兵を招き寄せて桂之介の亡骸を取り捨てさせ、更に又、酒宴を設けて人々をもてなしけり。

これよりして仏が岳の皆には大箱を第一の山主と敬って、その次に花的を押し据え、又、その次に秦名を居らせ、黄葉、燕、腐鶏、雌雉らは又、その次の山主となって五六百の兵あり。その中に花的は秦名よりその年が二ツばかり妹なれども、頼政卿の曾孫なれば、押して大箱の次の山主にぞしたりける。かかりし程に富山の城には踏通越中之介茂孝が新川、黒部の百姓どもの注進を聞きながら驚く事大方ならず、仏が岳に三人の賊婦の籠もりたるさえあるに、花的、秦名、黄葉らまでが悪を助けて黒部の陣屋を乱暴し、兵糧、軍用金を奪い取りしは真に由々しき悪逆なり。此の由鎌倉へ聞こえ上げ、北国の大軍をかり催して、速やかに攻め滅ぼさずば、我が身の安危は計り難しと思ひしかば、早打ちの使いをもて執権義時に注進す。この事予て仏が岳より富山へ遣わし置きたる忍びの雑兵が慌ただしく皆へ帰って、事しかじかと告げにければ、燕らは驚いて、「この山陰岨なりと云えども分内狭くして、且つ兵多からぬに寄せ手の大軍を引き受けて、勝ちを取らん事心もと無し。いかにすべき」と談合す。その時大箱はうち案じ、

「先にも噂をしはべりき、近江の国の賊が皆の小蝶らは三世姫を守りかしづいて、呉竹、蕃、桜戸、味鴨、二網、五井、七曲らの勇婦と共に数多の兵を従えて、大義を起こす者どもなり。かかれば又、各々も此の山をうち捨てて江鎮泊へ一味したまえ。さる時は名も正しく、例え幾千幾万の官軍東軍が押し寄せるとも、攻め動かす事叶うべからず。この儀に従いたまえかし」と云うを燕ら聞きながら、

「三世姫の御事は予てここにも風聞あり。江鎮泊の盛んなる趣も聞こえたれども、いかにせん彼処にちっとも縁は無し。さるを今この山をうち捨てて、遙々彼処へ赴くとも、小蝶の刀自らは疑って

留めんとは云うべからず」と云うを大箱聞きながら、

「それらの事は心易かれ。その小蝶は我が為に義を結びたる姉妹なり。且つ彼の人々が三世姫を奪い取りし時、事現れて小蝶の宿所へ討つ手の兵の向かいし折に私早くも告げ知らせ、その輩を落としたり。斯様の恩義があるなれば、私同道したらんに障りあるべうもあらずかし」と事つまびらかに説き示せば、燕は云うも更なり、この一群れの勇婦どもも誰かこれを喜ばざらん。「しかるべし」と答えつつ、次の日財宝、兵具、衣装、調度を取り集め、百匹余りの小荷駄に負わせ、五六百人の兵を二手に分けて、大箱、花的、燕は先陣に進み、秦名、黄葉、腐鷄、雌雉らは後陣に打たして近江を指して旅立ちけり。

かくて道すがらの関所、領主の城下にて、怪しみ咎める者ある時はこれは此の度院宣により近江の賊が砦の小蝶らを討つ手に向けられる北国の女武者らが各々手勢を引き連れて、都へ上りはべるなりと真しやかに答えにければ、押し止める者無かりけり。

さる程に日頃経て、大箱、花的、燕らは越前の丹生今北の郡界の杣山の麓を過ぎらんとする程に、と見れば遙かあなたなる今立郡の方よりして鎧たる女武者が手勢百人ばかりを従えて、杣山を望んで押し寄せ来たれば、又、杣山の峠の方より一人の女武者が百人ばかりの兵を引率してどっとおめいて馳せ下り、間近くなるままに、その二人の女武者は互いに馬を馳せ寄せて、「日頃、鎧を削れども勝負無きこそ遺恨なれ。今日は必ず雌雄を決せん。引くな進め」と罵り合って、峠を馳せ下りし女武者は管槍をひらめかし、又、彼の寄せ手の女武者は鎌槍の蛭巻きに金の短冊を付けたるをきらめかし、人混ぜもせず、只二人時移るまで戦いしが、いかにかしけん彼の短冊に槍の管の紐の房がくるくと絡まって、互いに引けども引けども離れ得ず、詮術も無く見えたりけり。さる程に大箱、花的、燕はこの目覚ましき戦いに左右無くは道去りあえず、大箱は遙か此方に乗り物を立てさせて、花的、燕は馬を控えて見物してありけるが、只今双方の槍の紐絡み付き、詮術なければ事の体たらくを見て、花的は矢頃を▼計って、静かに馬を乗り進め、弓に矢番い引き固め、矢声を掛けてひゃうと放せば、狙い違わずからまえたる彼の二筋の槍の紐を「ひゃう、ふっ」と射切りしかば槍はたちまち相別れ、左右へぱつとぞ退いたりける。これを見る諸軍兵は敵も味方も声を合わして、「射たり。射たり」と誉める声、しばしも鳴りも止まざりけり。この弓勢に二人の勇婦は戦いを止め馬を進めて花的にうち向かい、

「そも何人にて御座するぞ。類い稀なる射芸なり。名乗らせたまえ」と請い問えば花的にっこちうち笑んで、

「私が事は越中の早月の女弓取花的なり。又、春雨の大箱の刀自、仏が岳の珠簾燕もここに在り。そも又、御身らはいかなる人ぞ」と問うに兩人驚き慌てて、馬より下りて跪き、峠を下りし女武者がまず答えて云いける様、

「私は三日平氏(の乱)の残党なりし、何がしが娘にて苗代水筒鳥と呼ばれる者なり。世に親は失せて子ははべらず、元より武芸を深く嗜み、女ながら先亡の跡を継がんと思いつつ、この杣山に砦を構えて百余人の味方を集め、なお時至るを待つ者なり。しかるに此の女武者が近頃他所より押し寄せ来て、私の砦を奪わんとて、幾度と無く戦えども未だ勝負はつかざるなり」と告げれば寄せ手の女武者、

「私は伊達模様薄衣と呼ばれたる和泉の親衛の余類なり。女ながらも武芸を好めば、百余人の味方を集め、越路に城を立てんと思うにより、この山の砦を奪わんと欲すれば日毎日毎に押し寄せて、

攻め戦いはべりにき。しかるに君は予に聞く女弓執の刀自で御座わせしよな。そのみならず世に
隠れ無き、賢女大箱の刀自、並びに玉簾の刀自にさえ、面を合わせはべる事は思い掛けなき幸い
なり。何れの里へ赴くとて、数多の供人を引き連れてここらを過ぎりたまうやらん」と兩人ひとし
く問ひければ、大箱も乗り物より立ち出て、両勇婦を問い慰め、此の度、一味の勇婦らと諸共に賊が
岳に赴いて三世姫に従い奉らんと欲する志を告げ知らせ、

「願わくば御身たちも恨みを解き和睦して、我々と諸共に賊が岳へ赴きたまえ。さる時は名も正し
く、本意を遂げるに便りあり。この儀に従いたまえかし」と云うに筒鳥、薄衣の兩人ひとしく喜ん
で、一議に及ばず和睦して、大箱に伴って小蝶らの手につかんと願えり。かかる所に後陣の秦名、黄葉、
腐鷄、雌雄も兵を引き連れて、押し続いて来にければ、大箱はこの後陣の勇婦らに筒鳥、薄衣の
事をつぶさに告げて引き合わせたりければ、各々やがて対面して喜ぶ事大方ならず、かくて筒鳥は
大箱らの婦人主従と薄衣らを山の砦へ誘い酒食を設けてこれをもてなし、いよいよ大箱に従っ
て賊が岳へ赴かんと云う。これにより▼大箱らは兩三日仙山に逗留する程に、薄衣も己が住処へ
立ち帰り、物ごとく取り集めて小荷駄に負わして再び来にけり。

さる程に筒鳥も支度が既に調ひければ、仙山の砦を焼き捨て、大箱らに従いつつ、薄衣と諸共に
近江を指して進発す。その時大箱は同伴の勇婦らに云う様、

「我々かくうち連れ立って賊が岳へ赴けば、彼処の人々が疑って防ぎ戦わんとこそするならめ。か
かれば私は燕と諸共に世の常なる旅人にいでたちて、一日先へ行くべきなり。さてその砦に至
って夜叉天王らに由を告げれば事の障りはあるべからず」と云うに皆々諾なつて(同意して)※、その
儀にぞ従ひける。

※諾う(うべなう): ①もっともであると思う。同意する。②服従する。

これにより大箱は乗り物にうち乗って、燕と共に諸人より一日早く仙山を發足し、行き行つて
越前の引田の里まで来にければ賊が岳へ近くなりぬ。されば此の所にて諸人を待ち合はさんとて、
道の辺の酒屋に立ち寄り、まず昼休みをしたりける。その時燕はまず早酒屋に進み入り、座敷
やあると尋ねれば此の店の小者が出迎えて、「大勢にて渡らせたまえば、広き座敷も候なり」と云う
に燕は頷いて、

「我々は二人なれども供人は七八人あり。広き一間があるならば上下を一つに置いてたべ」と云う
に小者は心得て、「まずまず入らせたまえかし」と云いつつ座敷に走り行きぬ。これより先に年の齡
二十二三ばかりなる一人の女旅人が酒うち飲んで此の座敷に居り。酒屋の小者はその女旅人にうち
向かつて、

「無心の至りに候えば、御身は此の次の間なる小座敷へ移らせたまえ。只今多人数なる御客あり。
入れ替わらせたまえかし」と云うを女は聞きながら、

「私は先より居る者なるに、此の所を追い立てて小座敷へ移れとか。そは思いも寄らぬ事なり。お
よそ今の世に私に席を替えさせん者は僅かに只二人あり。その人達にあらざれば執権領主の仰せな
りとも、一寸も動きはせじ。戯言云うな」と息巻くにぞ、小者はしきりに手を揉んで、

「宣う由は道理なれども、願わくば彼処へ移つて商売をさせたまえ。さなくては一群れのお客を置
かん所無し。まげて聞きわきたまいね」と口説くを聞かず声振り立てて、

「叶わぬ事をくどくどと口説かば顎はり曲げん。女と思ひ侮つて、後悔すな」と罵りけり。こ

の時大箱と 燕 は此の座敷の入り口に佇んで在りけるが、 燕 は聞きかねて進み入りつつ、その女を取り鎮めんとしてけるを大箱急に押し留めて、

「彼女が小者を罵るとも、我らに預かる事は無し。さるを漫ろに聞き腹立てて、云い争わんは要無き業なり。私は彼女に問う由あり。まず待ちたまえ」と進み入り、その女にうち向かい、

「いと卒爾(失礼)にははべれども、御身は只今、世の中に只二人の人ならでは▼席を譲らじと宣いしが、その両人は誰なるぞや」と問えば女はあざ笑い、

「聞きたくば云うて聞かせん。世に私が敬う人は佐渡の国の折瀧の節柴殿と春雨の大箱殿なり。この両賢女にあらざれば誰にか席を譲るべき」と云うに大箱微笑んで、

「しからば御身は大箱を見知りてや御座するや」と問われて女は頭をうち振り、

「否、知る人ではなけれども、その女中は人を救うにいささかも財を惜しまず、世に類無き賢女なる由、人の噂に予て聞けば、いと慕わしく思うになん。尋ね合わんとこの月頃、一人旅をするにこそ」と云うに大箱いよいよ笑って、

「さては不思議の対面なり。私はすなわち春雨の大箱にてはべるかし」と名乗るに驚くその女は顔つくづく打ち守り、

「しからば御身は津の国の宋公明村に御座したる彼のお書役の大箱殿か」と再び問えば頷いて、

「宣う如く、宋公明村の大箱にはべるなり」と云うに女は席を避け、数度々額を突き、

「さる御方とは知らずして、ひどく無礼をしはべりにき。願うは許させたまえかし。私が事は先頃、時政の内室の牧の方の讒言により滅び失せたる秩父の庄司重忠の郎党なりし、何がしかの娘にて、名を石竹と呼ばれはべり。幼き頃より武芸を好んで男魂あるをもて、人あだ名して桐火桶の石竹と呼ばなしたり。去ぬる頃、折瀧の節柴の刀自に身を寄せし時、御身の事を詳かに聞きつつ、いかで見えんと願うものから、縁無ければ御行方をあちこちと尋ねて旅寝をしたるなり」と云うに大箱喜んで、我が上並びに花的、秦名、黄葉、燕、腐鶏、雌雉、筒鳥、薄衣らの事を告げ知らせ、此の度その勇婦らを伴って賊が岳の三世姫に従い奉らんと談合しつつ、ここまで来たる由を告げ知らせ、

「御身の寄る辺なからんには我々と諸共に彼処へ赴きたまえかし。花的ら七人は一日後より来るべし。此は燕にはべるかし」と引き合わせれば石竹は喜ぶ事大方ならず、燕と対面して無二の志を告げ知らせ、

「私の親姉妹は主君と共に討ち死にして、はかばかしき親類もはべらず。さるを諸勇婦達に従って彼の姫上に仕えまつらば、先亡の遺恨を晴らす便宜あるべき幸いなり。ついて大箱の刀自に申すべき一大事がはべるなり。私は御身を慕うの余りに去ぬる頃宋公明村の御宿所へ尋ね行って、妹御の園喜代の刀自に御行方を尋ねしに、園喜代の刀自が宣う様、

「我が姉大箱は今越後の黄昏、夕映姉妹の元にあり。御身が彼処へ行かんとならば大箱に一封の文を届けたまえかし。此は急用事にはべるなれば違わぬ様に頼みはべると、いと忙しげに聞こえ知らして、その文を渡したまいぬ。よって私は越後の黄昏許へ尋ね行きしに、そこにも御身は居たまわで、越中の早月の女武者頭の花的のもとにありと聞こえしかば、又、越中へ赴きつつ花的の刀自を尋ねしに、斯様斯様の事により花的は更なり御身も仏が岳の勇婦に一味して彼の砦に加わりたまいしが、いかなる故にや砦を捨てて行方も知れずなりたまいしと里人の風聞に聞こえしかば、いよいよ望みを失って、又、更に都の方を▼尋ねて見んとて、ここまで来つつ囚らずも名乗り合いぬる喜

ばしさを察したまえ」と云いつつやがて旅包みを忙わしく解き開き、取り出すその文を大箱に渡す
になん。大箱は受け頂いて封押し切ってこれを見るに、その状はまず大箱の安否を尋ね、次の下り
に「母様は持病の瘵が常に替わって、いと痛うもつれしより、長き病気にうち臥したまいぬ。よっ
て御身をいとどしく懐かしく思いたまえば、忍んで帰らせたまえかし。御身の行方の詮索も朱良井、
稲妻の助けによって、今は探ぐる(調べる)※者も無し。此の文が届きはべればすぐさま発足したまえ
かし。つまびらかに見参の日をかがなえて、待ちはべるのみ。あなかしこ」と書きたりしを再び
三度繰り返し見て、顔の色の変わるまで驚き憂える事大方ならず、さて石竹に尋ねる様、

「御身は私の宿所にて母には会いたまわずや。病の様子はいかなりけん。有りつるままに知らせ
たまえ」と云うを石竹聞きながら、

「否、御身の母御前には対面をせざるなり。勿論、一夜彼処に明かして、その明けの朝に園喜代の刀
自に別れて、忙わしく彼処を立ち去りはべりしかば、病気の事などは今日まで知らずはべりにき」
と云うに大箱いよいよ悶えて、その文を燕と石竹に見せて云う様、

「我が母は年も早や六十路に及びたまいしに、さる大病にうち臥したまはば本復の事心許なし。
私はかくまで不孝にて老いたる親に物を思わせ、その臨終に得逢わずば、世にある甲斐もあらず
かし。かかれば今此の所にて各々に引き別れ、一人故郷へ帰るべし。花的らの七勇婦が明日此の地
まで来る時にこれらの由を告げたまひね」と云うを燕は押し止めて、

「宣う趣は道理なれども、御身がここより振り捨てて一人故郷へ帰りたまえば、誰か又、我々を
賤の砦へ伴うべき。せめて明日まで待ちたまえ」とて石竹と諸共に言葉を尽くして留めれども、大
箱は聞かず頭をうち振り、

「親の病気を聞きしより、翼無き身を恨めるのみ。今日一日も千秋なり。いかでか明日まで待ち
はべらんや。さりながら小蝶の刀自らの引き付けには私が今此の所にて文を書きしたためて残し置
くべし。各々これを携えて彼処へ赴きたまわれれば、私が同道せずと云うとも、障りあるべうも
あらずかし」と言葉忙しく説き示して、小蝶へ送る一通の文を手早く書き終わり、やがて燕に渡
しつつ、人目を忍ぶ身なればとて供をも具せず只一人、難波を指していで行きぬ。

この故に燕は石竹と諸共に近江の国境に宿を取り、七勇婦を待ちしかば、次の日花的、秦名ら
の七勇婦は各々手勢を引き連れて、その里へ着きにけり。その時燕は石竹を七勇婦に引き合わせ、
さて大箱は親の病気の知らせにより、昨日俄かに立ち別れ、故郷へ帰りし由をつまびらかに告知
せれば、七勇婦らは驚き呆れて、呆然として詮術を知らず。その中に花的、秦名、腐鶏、雌雉ら
は燕をひどく恨んで、

「よしやさる事▼ありとても、今日まで刀自を留めざりしは返す返すも落ち度なり。彼の婦人が在
らずして、我々ばかりが賤の砦へ行きたればとて、いかにして小蝶の刀自らが留めんや。口惜しき
事してけり」と託言がましく怨ずれば、燕又、云う様、

「そこらは少しも抜かり無し。様々に言葉を尽くして石竹殿と諸共に留めしかども、なかなか大
箱の刀自は聞きたまわず。なお強いて争えば自害にも及ぶべき有様なりき。さりながら別れに望ん
で、大箱の刀自が一通の引き付け状を残したまいき。我々これをもて行けば、小蝶の刀自らは疑わ
ず留めんとこそ宣いき。これ見たまえ」と忙わしくその文を渡しにければ、皆々その文を見つつ談
合する様、大箱殿の文ありとても留められんや否やを知らねど、進退ここに極まりしを行かで止む

べき由も無し。陸地は道が嶮岨にて人馬進み難しと聞けり。船にて湖水を渡らんと遂に湖の辺に赴いて渡し船を尋ねるに、船一艘も無かりけり。かかる所に向かいの葦葦の茂みの内より忽然として一艘の戦船を漕ぎ出して、舳先に立つたる大将あり。是すなわち別人ならず虎尾の桜戸なり。

その時桜戸は声高やかに、

「来たれる寄せ手は官軍か。さらずば鎌倉方なるか。誰にもせよ、三世姫に敵対奴ども幾百人、幾千人ありとて、皆此の湖へ斬り沈めん。覚悟をせよ」と罵ったり。

此方の勇婦らはこれを聞いて、

「我々は討つ手の兵ならず。三世姫の御味方に越路より遙々来る何がしらにてはべるなり。大箱の刀自の状がここにあり。これを見て疑いを晴らしたまえ」と呼ばはるにぞ、桜戸は重ねて、

「大箱の刀自の状あれば、早く皆へ遣わして小蝶殿の披見の後に迎えを受けて赴きたまえ。まずそれまでは朱西の酒店にて休息あれ。案内を参らせん」と云う声聞いてや、二艘の早船が葦の内より漕ぎ出して、此方の岸へ乗り付けつつ、その一艘は大箱の文を受け取って引き返し、又、一艘の雑兵二人は一人が残り留まり船を守り、一人は陸に上って九人の勇婦らを案内す。かかりし程に又、一艘の戦船が葦の内より漕ぎ出して、舳先に立ちたる大将は赤頭の味鴨なり。▼その時物見の船と覚しき小船の内より雑兵が小旗を取って振りひらめかせば、味鴨の戦船はそのままに漕ぎ戻し、又、桜戸が乗ったる船も葦の中へぞ入りにける。

此方の勇婦らこれを見て、その軍配を感じつつ、かくまで駆け引き自在なれば、京鎌倉の討つ手、何万人にて攻めるとも、攻め破る事叶うべからず。真に奇妙の手配りやとて、いと頼もしく思いけり。かくて案内の雑兵は九人の勇婦とその兵らを案内して朱西の店に赴き、事しかじかと告知らせれば朱西やがて人々に対面して、奥の大座敷へ伴いつつ酒食をすすめてこれをもてなし、又、従い來たる六七百人の兵らはあちこちへ分かち居らしつ、これらにも漏らさず物を食わして、その夜はここに留めけり。

○かくてその明けの朝に軍師呉竹は九人の勇婦らの迎えとして朱西の店に来て、人々に対面して、三世姫の仰せと小蝶の口上を述べ伝え、用意の大船幾艘にか勇婦主従を分かち乗らして、賊が岳へ赴くにぞ、朱西も諸共に人々を送り行きぬ。既にして花的、秦名、黄葉、燕、腐鶏、雌雉、筒鳥、薄衣、石竹らは呉竹に案内をされて賊が岳に着きにければ、小蝶は桜戸、味鴨、杣木らと共に雄車坂の辺まで出迎えて、人々に対面し、衆議廳に誘いつつ、酒宴を設けて喜びの心を評し、又、従い來る兵らも宿所を当て行い、酒を飲ませなどしたるもてなし振りは大方ならず。只大箱が此の団樂に漏れたるを残り惜しとてひたすら嘆息したりける。

かくて次の日、今参りの勇婦らを三世姫の見参に入れんとて、小蝶は由を伝えるに、各々は礼服たるべしと触れたりける。しかれども花的ら九人の勇婦は只武具をのみ用意して、礼服の無き者多かり。小蝶は此の由を伝え聞き、すなわち九人の勇婦らに新しき小袖を各々一重ね、内着、帯まで取り揃え、密かに贈り遣わしければ、九人の勇婦らは喜んで小蝶が萬に心がけて蓄えの厚きを感じぬ。

さる程にその日の巳の頃おいに、三世姫は忠義堂へ出させたまう。かしつぎの女大将は小蝶を始めとして、呉竹、箸、桜戸、味鴨、二網、五井、七曲、杣木、真弓ら、皆礼服にて、御前にはべりたるその体たらくは齊々として嚴かなり。その時朱西は花的らの九人の勇婦を案内して、姫上の

御眼先おんまなさきに伺候しこう※しつ、一人一人に姓名を披露して、奏者そうしやの役を勤めけり。

三世姫さんせひめは花的はなまとら九人このたりを辺近ほとりくはべらして、一人一人に手熨斗てのし※をたまわり、頼み思し召す由を仰せらる。幼くましませどもいと賢さかしくぞ見えたまう。この御席末おんせきまつに晝鼠びるねずみの白粉しろこもはべりけり。白粉が牢屋ひとやを逃れ出てここへ参りし事の由は第八編の初めに云うべし。されば見参の礼法事果てて、姫上ひめうえが奥へ入りたまえば、小蝶ゆうふは又、別席このたりにて九人の勇婦ゆうふをもてなしけり。これよりして賊しずが岳たけの砦とりでには二十一人の勇婦と七八千の士卒あり、勢いここに盛んなり。▼

この日、江鎮泊こうちんはくの新古しんこ二十一員ゆうふの勇婦さかずきらは盃さかずきを巡らして、世に頼もしく語らう程に、筒鳥つつどり、薄衣うすきぬ、燕つばくらめらは花的はなまとがかの絡まりたる二筋ふたすじの槍やりを射切りたる弓矢い きの妙みょうを云いいでて、しきりに賞賛してけるを小蝶こちょうは聞きつつ真まこととせず、空言そらごとならんと思ひける。かくて各々は酒興おのおのの余り、小蝶にすすめ花はな的まとら九人このたりの勇婦ゆうふを伴って、山の風景を見せんとて、うち連れだちていでにけり。

此の時弥生やよいの末なるに、帰り遅れし一行ひとつらの雁かりがねが空中くうちゆうを渡るあり。花的はなまとは遙かにこれを見て、先に小蝶こちょうが我が弓勢ゆんぜいを真まこととせざりし気色けしきなりしをいと口惜くちおしく思ひしかば、ここにて又、弓勢を現わして小蝶に見せんと思案をしつつ、進み寄って小蝶に云う様、

「私は只今あの雁かりがねの第三番目い おなるを射落おんわらとして、御笑いそんいに供えはべらん。射損じれば許したまえ」と云いつつも雑兵ざっぴやうに持たしたる弓に矢とって打ちつがい、うち仰ぎつつひゃうと射ると、その狙いはちっとも違わず、第三番目の雁かりがねの羽節はぶしをぐさと射通いとしたれば、鳥は弦音と共に地に落ちしが身に傷の付かざれば羽ばたきをするばかりなり。小蝶は更なり、有りと有る者、その弓勢に驚き感じて等しくどっと誉めにけり。

なかんずく小蝶は深く感心して、類たぐい稀まれなる弓取りが味方の大将たる上はいよいよ姫上ひめうえの御運開ごうんひらくべし。いと目出度たたしとぞ讃えける。

※伺候しこう：①謹んで貴人のそば近く仕えること。②謹んでご機嫌伺いに上がること。

※手熨斗てのし：貴人が目下の者に接見するときの礼法の一つ。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>